

年號月日

職官姓名殿

官姓名印

年號月何年何ヶ月

第二號書式

某儀

過ル年月日退職被申付候處今般海軍退職下士文官採用規則ニ據リ文官奉職仕度候間御檢査ノ上御採用相成候様其筋へ御申立被下度別紙履歷書相添此段奉願候也

何府(縣)何國郡(區)何町(村)族籍寄留ノ者ハ寄留地モ記スヘシ

退職

年號月日

官姓名印

年號月何年何ヶ月

前書ノ通相違無之候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)戶長

姓名印

何府知事
何縣令 姓名殿

前書願出ニ付本人御檢査ノ上御採用有之度候也

年號月日

海軍卿姓名殿

何府知事
何縣令 姓名印

第三號書式

某戰役(公務上)ノ傷痍(疾病)ニ因リ過ル年月日退職被申付候處今般海軍退職下士文官採用規則ニ據リ文官奉職仕度候間御檢査ノ上御採用相成候様其筋へ御申立被下度別紙履歷書並ニ診斷書傷痍若クハ疾メ豫テ下附セラレタルモノヲ云フ寫相添此段奉願候也

何府(縣)何國郡(區)何町(村)族籍寄留者ハ寄留地モ記ス

退職

年號月日

官姓名印

年號月何年何箇月

前書ノ通相違無之候也

何府(縣)何郡(區)何町(村)戶長

姓名印

何府知事
何縣令 姓名殿

前書願出ニ付本人御檢査ノ上御採用有之度候也

年號月日

何府知事 姓名 印

海軍卿姓名殿

第二十一條 第八條ニ據リ特別ノ試験ヲ願フ者ハ其奉職志願ノ廳名ヲ願書中ニ記載シテ差出ス可シ

第二十二條 所管長官ニ於テ願書ヲ受領スルキハ履歷書ヲ調査シ意見書ヲ附シテ海軍卿ニ進達ス可シ

第二十三條 海軍部内各廳ニ於テ文官ヲ要スルキハ先ツ志願者ヲ採用スルヲ法トス

第二十四條 各廳ニ於テ文官ニ缺員アルカ又ハ増員ヲ要シ志願者ヲ採用セント欲スルキハ海軍卿ニ上請ス可シ

第二十五條 海軍卿前條ノ上請ヲ受ケタルキハ試験及第者名簿ノ順序ニ從ヒ之ヲ任補ス但其職務ニ依リ特別ニ選抜シテ任補スルコアル可シ

第二十六條 志願者ヲ採用スルニ當リ其官等ハ試験ノ優劣ト舊官等

ヲ參互斟酌シテ之ヲ定ムルモノトス

第二十七條 試験及第者名簿ニ於テ採用ノ順ニ當ル者ト雖モ服役中ハ採用セラレサル者トス

第二十八條 志願者試験ノ爲メ其場所ヘ往復スル旅費ハ總テ自辨トス但第二十五條ニ據リ採用シ赴任スルキハ定則ノ旅費ヲ支給ス

第二十九條 志願者ニ於テ其志願ヲ取消サント欲スル者ハ之ヲ許ス第三十條 志願者採用セラレサル中年齡六十歳ニ滿チ又ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルキハ其志願無効ニ屬スルモノトス

第三十一條 第二十九條ニ據リ若シ其志願ヲ取消サント欲スルキ又ハ志願者ノ身上ニ異動ヲ生シ或ハ轉居轉籍若クハ賞罰等ニ關シ履歷上改正ヲ要スルコアルキハ其旨ヲ詳記シ最初願出ノ手續ニ依リ届出可シ但服役中願出後退職シタル者ハ退職者願出ノ手續ニ依ル可シ

第三節ノ五 陸軍々人休暇規則

○明治十八年八月陸軍省達甲第三拾七號達

陸軍軍人休暇規則左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治十四年達甲第三拾號陸軍武官休暇規則同十五年達甲第四拾四號達同附錄ハ廢止ス

陸軍軍人休暇規則

第一條 凡軍人歸省或ハ轉地療養其他事故アリテ休暇ヲ要スル時ハ此規則ニ據リ請願スヘシ

第二條 准士官以上ハ往復ヲ除キ四週日以内ノ休暇ヲ請願スルヲ得但轉地療養及ヒ休暇中發病ノ者ハ延期ヲ願フコトヲ得ヘシ

第三條 將官並ニ同等官ノ休暇願ハ陸軍卿ヲ經テ太政官へ上申シ許可ヲ請フヘシ

第四條 各所管ノ長官タル上長官ノ休暇願ハ陸軍卿ノ許可ヲ請フヘシ

第五條 准士官以上ノ休暇願ハ其所官之ヲ許可スヘシ但陸軍省內各局並ニ砲工兵會議出仕ノ准士官以上ノ休暇願ハ其長ヨリ陸軍卿ニ上申シ許可ヲ請フヘシ

旅團長營所司令官ハ其部下准士官以上二週日以内ノ休暇願ハ之ヲ許可スヘシ

第六條 准士官以上ノ休暇願書ハ其要スル旨趣及ヒ日數ヲ記載シ差出スヘシ但轉地療養並ニ延期及ヒ休暇中發病延期ヲ願フ時ハ陸軍醫官若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ添フヘシ

第七條 下士卒父母病氣或ハ死亡等ニテ歸省ヲ願フ時ハ其情實ニ由リ往復ヲ除キ二週日以内ノ休暇ヲ許スヘシ故ニ右等ノ事故ニテ休暇ヲ願フ時ハ親族ニ於テ願書ヲ作り病氣ナレハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ戸長戸長アラハ區長以下ノ奧書證印ヲ受ケ本人所屬ノ隊或所管へ差出スヘシ

第八條 隊附下士卒ノ轉地療養ハ陸軍醫官ノ診斷書ニ依リ之ヲ命スルヲ以テ本人ヨリ請願スルヲ許サス隊外下士卒ニ在テハ陸軍醫官醫官アラサルノ診斷書ヲ添へ本人ヨリ請願スル時ハ往復ヲ除キ四週日以内ノ休暇ヲ許スコトアルヘシ若シ其日限中快復ニ至ラサル時ハ醫師ノ診斷書ヲ添へ追願スヘシ

第九條 隊附下士卒ノ休暇ヲ許可スル手續ハ各兵內務書中ニ記載ス

ルカ如シト雖モ旅團附下士ニ在テハ旅團長之ヲ許可シ隊外下士卒
ニ在テハ各所管長若クハ營所司令官之ヲ許可スヘシ
第十條 下士卒休暇ノ免許ヲ得タル者ニハ左式ノ免許證及ヒ宿泊證
書ヲ與フ
六寸

兵種隊號		官(卒)姓名	
(聯隊長 聯隊ヲ爲サハ 軍用電信隊提理 職官姓名印)		(中(小)隊長 聯隊大隊副官 軍用電信隊長 職官姓名印)	

表 何日間依願休暇免許證 該隊印

此免許證ハ何年何月何日何時ヨリ何年
何月何日何時マテ休暇ヲ與フルノ證ナ
レハ其期限ニ至レハ必ス歸營スヘシ休
暇中ト雖モ陸軍ノ法令ヲ遵奉シ且地方
ノ命令ニ服従スヘシ表書官(卒)所持金
若干アリ又其所持品左ノ如シ

金何々 何々 何々
何々 何々 何々

此官(卒)右ノ通金子並ニ諸品ヲ所持ス
レハ其往來途中ニ於テ他人ノ扶助ヲ受
ルコトナカルヘシ

隊附下士卒ニ與フル證書式 隊外下士卒ニ與フル證書式

宿泊證書 兵種隊號		官(卒)姓名	
(聯隊長 聯隊ヲ爲サハ 軍用電信隊提理 職官姓名印)		(中(小)隊長 聯隊大隊副官 軍用電信隊長 職官姓名印)	

表 何日間依願休暇免許證 該隊印

此免許證ハ何年何月何日何時ヨリ何年
何月何日何時マテ休暇ヲ與フルノ證ナ
レハ其期限ニ至レハ必ス歸營スヘシ休
暇中ト雖モ陸軍ノ法令ヲ遵奉シ且地方
ノ命令ニ服従スヘシ表書官(卒)所持金
若干アリ又其所持品左ノ如シ

金何々 何々 何々
何々 何々 何々

此官(卒)右ノ通金子並ニ諸品ヲ所持ス
レハ其往來途中ニ於テ他人ノ扶助ヲ受
ルコトナカルヘシ

休暇免許證ハ隊附ノ者ニ與フル書式ヲ示スモノトス故ニ隊外ノ者ニ在テモ亦之ニ準シ調製付與スヘシ一休暇免許證及ヒ宿泊證書ハ両面ヲ用ユル爲メ共ニ厚紙ニテ製シ若シ宿泊證書紙幅足ラサルハ別紙ヲ以テ補綴スヘシ

第拾壹條 下士卒休暇ノ免許ヲ得タル者ハ休暇免證及ヒ宿泊證書ヲ所持シ略帽衣袴及ヒ脚絆ヲ着シ脚絆ヲ着スルト着セザルトハ兵種ニヨルヘシ帶革並ニ銃劍或ハ軍刀ヲ佩ヒ且外套ヲモ所持スヘシ

第拾貳條 下士卒旅行中宿泊或ハ乗船スル時ハ所在ノ戸長或ハ船長ニ免許證ヲ示シ宿泊證書ニ捺印ヲ受クヘシ若シ其途中發病川留等ニテ滯留スル時ハ戸長ヨリ其事由書ヲ取り或ハ醫師ノ診斷書ニ戸長ノ與書證印ヲ受ケ歸着ノ上之ヲ差出スヘシ

第拾三條 下士卒歸郷若クハ某地ニ滯留スル時ハ直ニ其地ノ戸長ニ休暇免許證ヲ示シ宿泊證書ニ捺印ヲ受ケ其宿泊證書ハ期日マテ戸長ニ預ケ置キ且地方ノ掟軍人ノ到ル間敷箇所等ヲ承知スヘシ而シテ出發ノ期ニ至レハ宿泊證書ヲ受取其發途ヲ證スル爲メ重テ之

ニ戸長ノ捺印ヲ受クヘシ且歸郷中父母病死スト雖モ期日ニ至レハ必ス速ニ歸着スヘシ

第拾四條 下士卒歸郷中本人病氣ニテ期日ニ出發シ難ク延期ヲ要スル時ハ願書ニ陸軍醫官若クハ地方病院醫師ノ診斷書ヲ添ヘ戸長ノ與書證印ヲ受ケ所屬ノ隊或ハ所管ニ送呈スヘシ若シ其地方ニ陸軍醫官若クハ病院ナキ時ハ其治療ヲ受ケタル醫師ノ診斷書ヲ添フヘシ

第四節 戸長選任及選舉

○十七年五月第四十一號達

戸長ハ府知事縣令之ヲ選任ス但町村人民ヲシテ三人乃至五人ヲ選舉セシメ府知事縣令其中ニ就テ選任スルコトヲ得ヘシ此旨相達候事

○十七年五月內務省乙第二十五號達

本年第四十一號公達ニ據リ町村人民ヲシテ戸長ヲ選舉セシムルトキハ其選舉方ハ區町村會議員選舉ノ例ニ照準ス可シ此旨相達候事

第四節ノ二 戸長身分

○十五年十二月第七十一號達

戸長身分取扱ノ義明治七年三月二十八號ヲ以テ相違置候處自今左ノ
通改定シ其俸給ハ府知事縣令適宜之ヲ定ムヘシ

第四節ノ三 戸長職務上ノ過失

○十八年二月内務省甲第四號達

戸長職務取扱上過失アルトキハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但
明治十一年乙第八十號達第五項ハ廢止ス

○第二款 恩給

第一節 官吏恩給令

明治十八年七月太政官第四拾貳號達

明治十七年一月第一號達官吏恩給令第十條第二項左ノ通改正候條此旨
相違候事

判任官ハ公務ニ依リ死去セシトキニ限り其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ
本條及第十二條第十三條第十四條ニ準スルコトアル可シ但其扶助
料ハ轉給セス

第一條 官吏恩給ハ文官勅任官奏任官判任官其本官奉職ノ年數及ヒ
其年齡ニ依リ退官後之ヲ支給ス但出仕ハ本官ニ準ス

○太政官 農商務省 死傷
官 農商務省 死傷
當 二儀ハ是迄
御 二業上死傷
當 內規據上死傷
致 來候處本一年一處
第 一號ヲ以テ年一處
恩 給令御布達相成

候得共一時ノ手當
自ラ御旨趣ノ異ハ
シテ抵觸セサルハ
勿論存候何ナルハ
レハ恩給令ハ勅奏
判任官奉職ノ年數
及ヒ其年齡ニ依リ
退官者ヲ待ツ所リ
恩典ニシテ其第ニ
條第三條第四條ノ
如キ未タ不治ノ病
マシテ又ハ不治ノ
ニ罹リタル者ハ重傷
負ヒタル者ハ重傷
ヲ別ル所ノ者ニ重傷
手當規令中死傷ニ
當テ受ルモスハ手傷
給支給セテ以テ恩
明支給セテ以テ恩
リ依テハ扶助料ヲ
與テ後恩給料ヲ上
請シ不苦義ト存候

第二條 恩給ハ官吏滿十五年以上奉職シ年齡六十歳ニ至リテ退官ヲ
許シタル者又ハ年齡六十歳ニ至ラズト雖モ滿十五年以上奉職シタ
ル後廢官廢廳若クハ不治ノ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘサル確證アル者
ニ終身之ヲ給ス

大臣參議各省卿元老院議長參事院議長ハ滿二年以上奉職シタルノ
後退官スル時ハ特旨ヲ以テ終身恩給ヲ支給スルコトアル可シ

第三條 在職滿十五年以内ト雖モ公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重
傷ヲ負ヒ其職ニ堪ヘズ退官セシメタル者亦終身恩給ヲ支給ス

第四條 公務ニ依リ重傷ヲ負ヒ若クハ不治ノ病ニ罹リ開業醫ノ診斷
書ヲ具ヘテ其職ニ堪ヘサル旨ヲ證明スルコトヲ得ル時ハ其退官ヲ
許シ在職年數ニ拘ハラズ終身恩給ヲ支給ス

第三條及ヒ前項ノ場合ニ於テ盲聾或ハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ不治ノ
症ニ罹リタル者ハ其退官ヲ命シタルト又ハ退官ヲ許シタルトニ拘
ハラズ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ現官相當恩給ノ外ニ猶其最下金額
十分ノ七迄ヲ増給スルコトアル可シ

得共脚カ疑團ニ涉
此段相義モ有之候間
月明相治十七年九月
指令之趣恩給ヲ受
ハ給料ヲ除クハ外
ニハ給與スル限リ
心非ラスト可相
○内務省
大分縣ヨリ療治
警部給方伺療治
貨幣費部補ニシテ
強盜其他ノ放火人殺
逮捕ニ際シ非常ニ
盡力シ遂ニ負傷明
十一年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者
第七條 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者

開業醫ノ診斷書ニ就キ疑フ可キモノアルトキハ本屬長官ハ更ニ醫
員ヲ派遣シ其診斷ニ依リ事實ノ當否ヲ判定ス可シ
第五條 恩給ハ退官現時ノ俸額ニ依ル其給額ハ奉職滿十五年ニシテ
俸給年額ノ四分ノ一即チ二百四十分ノ六十トシ爾後滿一年毎ニ二
百四十分ノ一ヲ加ヘ滿三十五年ニ至リ二百四十分ノ八十即チ俸給
年額ノ三分ノ一ニ至ツテ止ム但非職中退官スル者ト雖モ恩給ハ其
在職俸給ノ年額ニ照シテ之ヲ支給ス
第二條ノ第二項并ニ第三條第四條ニ掲クル所ノ十五年未滿ノ奉職
者ニ恩給ヲ支給スルコトアルトキハ其給額ハ俸給年額二百四十分ノ
六十二當ルノ額ヲ以テス
進級後一年未滿ニシテ退官シタル者ハ前官ノ俸給ニ依リ恩給ヲ支給
ス但公務ニ起因スル傷痍疾病ノ爲メ退官シタル者ハ此限ニアラス
第六條 奉職滿十五年ニ超ル者ト雖モ年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ
自己懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ハ恩給ヲ支給セス
第七條 奉職年數ノ計算ハ明治四年八月ヨリ起算ス其以後任官ノ者

ル時ハ明治八年
三號規則ニ照準
療治規則ニ照準
方計追テ御届ケ
及取然哉御届ケ
指令ノ趣恩給ヲ受
ノ上ハ負傷シタル
者ハ醫員ノ傷疾
立書ニ由リ傷疾
ノ輕重ニ療養ノ事
ニ從ヒテ療治ス
實體ヲ以テ給ス
實費ヨリ支給ス
ハ但施行ノ上
當省乙第拾年
出號ニ據リ
八月三十一

ハ其拜命ノ月ヨリ起算ス但年齡二十歳未滿ノ奉職年數ハ算入セス
明治四年八月以前ヨリ奉職シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對
スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スルノ
金額ヲ以テ別ニ一時賜金トシテ給與ス（明治十七年四月第三十五
號達改正）
第八條 武官ヨリ文官ニ轉シ若クハ退官後再ヒ任官シタル者ハ前官
後官ノ奉職年數ヲ通算ス但御用滯在中ノ年月及ヒ嘗テ滿年賜金若
クハ退官一時賜金ヲ受ケタル者ノ前官年數ハ算入セス
第九條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ爾後退官ノ節其俸額前官ヨリ
少キトキハ尙ホ前官ノ俸額ニ依リ恩給ヲ支給ス
第十條 勅奏任官奉職中既ニ恩給ヲ受ク可キ期ニ至リタル者及ヒ其
退官恩給ヲ受クル者死去セシトキ又ハ其期ニ至ラスト雖モ公務ニ
依リ死去セシトキハ其情狀ニ依リ特旨ヲ以テ其寡婦ニ扶助料トシ
テ死者生存中ノ恩給年額四分ノ二以内ヲ終身支給スルコトアル可
シ寡婦ナケレハ其繼嗣ノ孤兒男女並ニ實子ナハス滿二十歳ニ至ル迄之ヲ

大藏省ヨリ官吏ノ科
 枋木縣出他ノ
 恩給金方其
 目整理付伺第壹號
 儀年一令月達ニ依號
 本給給與可公相成恩
 恩給令及今般二月俸
 規金則第二十五條
 四月五號ヲ以テ
 三廢官吏九給令
 被第十恩給令
 十兩條加公達
 相成賜金ノ義
 共總テ別途御下

給スルコトアル可シ但寡婦ハ其本夫ノ在官中ニ入籍シタル者ニ限ル
 判任官ハ奉職中既ニ恩給ヲ受ク可キ期ニ至リタル者ニシテ公務ニ
 依リ死去セシトキニ限リ其情狀ニ據リ特旨ヲ以テ本條ニ準スルコ
 アル可シ但其扶助料ハ寡婦ニ止マリテ孤兒父母祖父母兄弟姉妹ニ
 及ハス

第十一條 寡婦復籍若クハ再嫁シ又ハ死去シタルトキハ其扶助料ハ
 更ニ繼嗣ノ孤兒二十歳未ニ給スニ給ス
 扶助料ヲ受クル孤兒既ニ嫁娶シ若クハ官廳へ奉職シ俸給ヲ受ケ又
 ハ諸官立學校ノ官費生徒ト爲リタルトキハ其扶助料ヲ給セス

第十二條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル寡
 婦復籍若クハ再嫁シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父
 母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキトキハ其情狀ニ
 依リ特旨ヲ以テ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二以内ヲ終身支給ス
 ルコトアル可シ

第十三條 其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スルトキハ先ツ之ヲ父ニ

付可相成義ニ候
 哉可相成義ニ候
 官吏恩給令ニ依
 リ郡區書記ニ支
 給スヘキ恩給ハ
 國庫ヨリ心辨給
 儀トヨリ相心得
 公達ニ依リ三
 廿六日內務卿ヨ
 リ被相達候如ク
 是又前陳ノ如ク
 相心得可然哉
 前條恩給金御下
 付可相成義ニ候
 立、可相成義ニ候
 編入費豫算帳又
 ハ恩給金ノ時
 々請求可致儀ニ
 候哉且科目ヲ設
 ケハ整理候テ可
 (指令)十七年七月十

給シ其父死歿若クハ其恩典ヲ失フコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス
 以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可
 シ但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ産
 業ヲ營ムト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ナレトキ本人死歿ノ
 際年齢五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在リシ者ニ限ル

第十四條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來
 死者ニ依リ生活セル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾不具ノ
 兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族ナキ者ハ其情狀ニ依リ特旨ヲ
 以テ寡婦ニ相當セル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多
 カラサル額ヲ一時限リ支給スルコトアル可シ

第十五條 恩給ハ在官者退官ノ翌月ヨリ支給ス扶助料ハ恩給ヲ受ケ
 又ハ受ク可キ者死去ノ翌月ヨリ支給ス其轉給スル者亦同シ

第十六條 恩給及ヒ扶助料ノ給否ハ本屬長官若クハ其所管地方長官
 ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ太政大臣之ヲ裁定ス
 恩給及ヒ扶助料ノ給與ニ關シ若シ穩當ナラサル廉アルコトヲ覺知

第一編行政 第一類官制 官吏恩給令

一、時賜金ハ他日御
 用係免候再任給
 シ本官ニ奉職年
 ル者ハ前シ後職
 數通算シ候然哉
 此段相治候也
 指令月明二七九
 指令月明二七九
 ○太政官十通年十
 工部省三條ノ
 恩給令第三十
 官在官中死去
 者ハ在官中死
 分官有之ハ死
 ノ者ト有之ハ死
 職ノ年數及死
 勿論ニセサル
 第七條但書中
 第二條未滿年
 年數ハ算入ス
 年二七算入ス

- 第四條 恩給願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ
- 一 履歷書
 - 二 戸籍寫
 - 三 診斷書病者ニ要ス
 - 四 見證書公務ニ依リ負傷タル者ニ要ス
- 第五條 本令第四條ニ掲クル最下金額十分ノ七迄ノ増給差等ハ左ノ如シ
- 一 二肢ヲ亡シ或ハ兩眼ヲ盲スル者 十分ノ七
 - 二 前項ニ等シキ傷痍或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ六
 - 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ五
 - 四 前項ニ等シキ傷痍或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ四
 - 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者 十分ノ三
 - 六 前項ニ等シキ傷痍或ハ疾病ヲ受ケシ者 十分ノ二
- 第六條 本令第三條ニ掲クル公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ重傷ヲ負フトハ一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ失フニ等シキ者ニ限ル

有之ハ奉職年數
 ノ計三方ヲ示ス
 止ニ關シテハ
 更ニ係年數ニ
 存候テハ無二
 十歲未滿者ト
 モ官吏ニシテ
 死去候節ハ同
 依リ得下然哉
 心候可至急御
 伺候條也御指
 有之候也御指
 指令ノ趣官吏
 令者ハ二適年
 義ノ可ニ心得
 月明廿四日一

- 第七條 公務ニ依リ不治ノ病ニ罹リ又ハ負傷シ恩給ヲ受ケタル者仍ホ重症ニ趨キシトキ左ノ期限内ニ出願スレハ查覈ノ上更ニ増加恩給ヲ下賜スヘシ
- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ二箇年
 - 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者及之ニ等シキ者ハ三箇年
- 第八條 前條ニ該當シ増加恩給ヲ願ハントスル者ハ其願書第五式ニ診斷書及恩給證書ヲ添ヘ之ヲ本籍地方長官ニ差出スヘシ
- 第九條 年齢六十歲未滿ト雖モ滿十五年以上奉職シ服務紀律違犯ノ故ニ非スシテ諭旨退官ノ者若クハ非職滿期免官ノ者ハ本令第二條廢官廢廳ノ例ニ依ル
- 第十條 官吏滿五年以上奉職ノ後本官ヲ免シ直ニ御用掛或ハ准官吏等ニ採用ノ者ハ其際恩給或ハ本令第二十九條ノ一時賜金ヲ給セス其御用掛或ハ准官吏退職ノトキニ於テ前官ニ對スル恩給若クハ一時賜金ヲ下賜ス但御用掛或ハ准官吏奉職中自己ノ便宜ニ依リ其職

ヲ辭スル者及服務紀律ニ違ヒ諭旨退職ノ者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免職ノ者ハ恩給或ハ一時賜金支給ノ限ニ在ラス

第十一條 奉職年數八月ヲ以テ計算スヘシ但退職同月内ニ再任セシ者ハ其月ヲ二箇月ニ算スルヲ得ス

第十二條 非職中ノ年月ハ奉職年數ニ算入スヘシ但官吏非職條例第七條ニ該ル者ニシテ非職俸ヲ受ケサルノ年月ハ之ヲ除算ス

第十三條 本令第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一箇月分ニ相當スル金額ヲ云

第十四條 本令第二十九條及第三十條ノ一時賜金ハ非職中退官或ハ死去スル者ト雖モ其本俸ノ額ニ照シテ之ヲ支給ス

第十五條 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ服務紀律ニ違ヒ諭旨退官ノ者及懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官ノ者再ヒ任官スルコトアルモ其前官年數ハ之ヲ通算セス

第十六條 公務ニ依リ死去ノ者アルトキハ其事實ヲ保證シタル書面見證人アレハ其證書ヲ添ヘ及履歷書又恩給ヲ受クルノ期ニ達シタル者死去セシ

トキハ其履歷書ヲ本屬長官ヨリ遺族ニ下付スヘシ

第十七條 扶助料願書ニ添フヘキ證據書類ハ左ノ如シ

- 一 死者履歷書在官中死去シタルトキニ要ス
 - 二 戶籍寫
 - 三 恩給證書轉給ノトキニ要ス
 - 四 醫師ノ死亡届書若クハ檢案書公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス
 - 五 本屬長官保證書公務ニ依リ死去シタルトキニ要ス
- 第十八條 本令第十三條及第十四條ニ掲クル癱疾又ハ不具ノ者扶助料ヲ願ハントスルトキハ前條書類ノ外仍ホ其診斷書ヲ添フヘシ
- 第十九條 本令第十條ニ掲グル恩給年額四分ノ二以内ノ差等ハ公務ニ依リ死去セシ者ノ寡婦ニハ四分ノ二其他ノ寡婦ニハ四分ノ一トス
- 第二十條 本令第十條ニ掲グル恩給ヲ受クヘキ期ニ至ルトハ奉職滿十五年以上ヲ云フ
- 第二十一條 扶助料ヲ受ケタル寡婦其支給ヲ止メラル、トキハ轉シ

テ之ヲ繼嗣ノ孤兒ニ給ス

第二十二條 扶助料ヲ受ケタル寡婦死去シテ孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケタル孤兒死去シ仍ホ其亡夫或ハ亡父ノ父母又ハ祖父母アルトキハ本令第十二條ノ例ニ依ル

第二十三條 本令第十三條ニ掲グル母及祖母癱疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハス他ニ之ヲ奉養スル者ナキトキハ同條但書父及祖父ノ例ニ依ル

第二十四條 恩給或ハ扶助料ノ出願ヲ許可セシトキ恩給許可令ハ本屬長官ヲ經テ直ニ本人ニ下付シ扶助料許可令ハ内務省ニ交付シ内務省ハ本籍地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス

恩給證書ハ總テ内務省ニ交付シ内務省ハ本籍地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス

第二十五條 本令第十六條第二項ニ掲グル請願ノ期限ハ恩給證書受領ノ日ヨリ三箇月トス其期限ヲ過ルモノハ受理セス

第二十六條 本籍地方廳ニ於テ本令第二十五條ノ出願ヲ許可シタル

トキハ直ニ大藏省ニ届出テ且本人移住ノ地方廳ニ通牒スヘシ

第二十七條 恩給ヲ受クル者賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルトキハ本令第十八條第一項ニ準シ扶助料ヲ受クル者同上ノトキハ本令第十九條ニ準ス

第二十八條 恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者本令第十一條第二項第十八條第三項第四項ニ該ルトキハ其本籍地方廳ヨリ直ニ恩給局ニ届出ツヘシ

本令第十八條ニ掲グル再ヒ官ニ就キ俸給ヲ受クルトハ准官吏以上ヲ云フ

第二十九條 恩給若クハ扶助料ヲ下賜シ又ハ其支給ヲ止メ若クハ停メタル時ハ恩給局ヨリ之ヲ大藏省及會計検査院ニ通牒スヘシ

(諸書式略)

○明治十八年六月太政官第貳拾七號達
各廳ニ於テ左ノ各項ニ該ル者アルトキハ其旨恩給局ニ通牒スヘシ此旨相達候事

恩給ヲ受ル者ヲ准官吏以上ニ採用シ又ハ之ヲ差免シタルトキ扶助料ヲ受ル者ヲ歳出科目表俸給ノ部ヨリ俸給ヲ支給スヘキ者ニ採用シ又ハ之ヲ差許シタルトキ

明治八年^四月第四拾八號達陸軍武官傷痍扶助死亡ノ者祭案家族扶助概則及同年^八月第百四拾八號達海軍退隱令ニ據リ扶助料若クハ退隱料ヲ受ル者前二項ニ該ルトキ

官吏恩給令ニ據リ扶助料ヲ受ル者ヲ官立學校ニ於テ官費生徒ニ命シ又ハ之ヲ差免シタルトキ

○十八年四月内務省甲第十一號達

一 戸長滿五年以上奉職十一年未滿ニシテ退官セシキハ現俸給三個月分ヲ給シ其滿十一年以上ニシテ同上ノ者ニハ現俸給四箇月分ヲ給ス但自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務規律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ニハ總テ之ヲ給セス

一 戸長在職中死亡ノ者ハ現俸給三箇月分ヲ給ス

第一節ノ四 文官傷痍疾病等差例

○十八年三月第十六號達

官吏恩給令附則第五條傷痍疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得此旨相達候事

文官傷痍疾病等差例

公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ官吏恩給令附則第五條ニ掲グル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルノ概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ癱スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ癱スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ両機ヲ併セ癱スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ癱スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スルモノハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神経痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ癱スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ癱管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六

項トス

第十三條 陰莖或ハ睪丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏睪丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全癱スル者ハ第一項トス

第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ癱スルモ全肢ノ用ヲ癱スルニ至ラサル者ハ第六項トス

第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒着若クハ強硬等ノ爲メニ把握探摘ノ用ヲ癱スル者ハ第五項トス

第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除

キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ步行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス
第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス

第一節ノ五 收稅官吏給與規則

○明治十八年七月大藏省第四拾三號達

收稅官吏給與規則左ノ通相定候條來ル八月一日ヨリ施行スヘシ
右相達候事

收稅官吏給與規則

第一條 月俸ハ一般ノ月俸規則ニ據リテ支給スルモノトス

第二條 府縣管内並旅行日當ハ委任官金貳圓判官任金壹圓三拾錢巡廻日當ハ委任官金壹圓五拾錢判任官金壹圓ヲ支給スルモノトス

第三條 前條出張巡廻トモ本廳ヨリ片道壹里以上三里未滿ニシテ即日歸着スルトキハ手當トシテ委任官一日金五拾錢判任官一日金三拾錢ヲ支給スルモノトス

第四條 本則第二條第三條ニ掲グル外ハ總テ一般旅費定則ノ日當額ヲ支給スヘシ

サル額ヲ給ス十一年以上ハ一年毎ニ金五十錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷痍給助ノ額

- 一 一等傷ヲ終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者ハ年金三十圓ヨリ少カラス四十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 二 二等傷終身不具トナリ自用ヲ辨シ得ル者ハ年金二十圓ヨリ少カラス三十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

- 一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金二十圓ヨリ少カラス五十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤子廿歳ニ至レハ廢止ス但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母又ハ二十歳未満ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五十圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢

止スルニ際シ一時金五十圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條 療治料ハ傷痍又ハ疾病ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料

- 一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金十圓ヨリ少カラス十五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
- 二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五十圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪セラレタル者
- 二 懲罰ニ依リ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者
- 二 公權ヲ停止セラレタル者

○内務省 宮城集治ノ儀ヨリ
 看守電報ノ豫備軍
 看守ノ呼演習ノ日
 欠勤日數ニ算セ
 スハテ勤日數ニ算セ
 指令月日八年八
 看守令月日八年八
 方守令月日八年八
 報ヲ以テ本出ノ電算
 豫備後シ軍出ノ呼
 召集ニ應シ勤務及
 ヒル日數ハ勤務及
 入欠勤ノ儀ト心得
 事ハ此旨及指令候

三 失踪シタル者
 四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者
 第一節ノ二 巡查看守休暇概則
 明治十八年七月内務省番外達
 巡查看守休暇概則左ノ通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨
 相達候事
 但本文ニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消候事
 巡查看守休暇概則
 第一條 巡查看守ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スルヲ以テ休暇ヲ許サル
 一ヶ月間皆勤ノ者 三週間
 一ヶ月間皆勤ノ者 一週間
 第二條 休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フ
 一ヶ月間皆勤ノ者 三週間
 一ヶ月間皆勤ノ者 一週間

○内務省 二日
 愛媛縣ヨリ 巡査
 看守令月日八年八
 儀ニ付同番外
 本年御省番外
 以テ達セテ第一
 ル云々概則第一
 條云々勤勞者
 二條云々勤勞者
 三條云々勤勞者
 四條云々勤勞者
 五條云々勤勞者
 六條云々勤勞者
 七條云々勤勞者
 八條云々勤勞者
 九條云々勤勞者
 十條云々勤勞者
 十一條云々勤勞者
 十二條云々勤勞者
 十三條云々勤勞者
 十四條云々勤勞者
 十五條云々勤勞者
 十六條云々勤勞者
 十七條云々勤勞者
 十八條云々勤勞者
 十九條云々勤勞者
 二十條云々勤勞者

第三條 非番父母祭日及ヒ職務上負傷者ノ欠勤ハ欠勤日數ニ算入セ
 第四條 休暇日數ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス
 明治十八年七月内務省番外
 看守休暇概則左之通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨相達
 候事
 但本文ニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消候事
 (看守休暇概則ハ前項番外達巡查看守休暇概則ニ同シ)
 第二節 陸軍恩給令
 ○十六年九月第三十七號達
 陸軍恩給令別冊ノ通改正候條此旨相達候事
 但陸軍罷役俸並恤金令ハ廢止ス
 陸軍恩給令
 陸軍恩給令目錄
 第一章 總則

第一編行政 第一類官制 巡查看守休暇概則 陸軍恩給令 百八十九

暇ニ準據スル限
ニアラス

步騎砲工輜重兵中少尉 憲兵下士 會計書記

看護長 馬醫生 軍樂次長 軍樂手

四十五

步騎砲工輜重兵下士 憲兵卒 雜卒 諸工

四十

步騎砲工輜重兵卒

三十五

第四條 軍人定限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特抜又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ仍ホ留任ヲ命スルコトヲ得但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス

第五條 上長官士官准士官未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ士官以上ハ陸軍卿准士官ハ其所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權奪削ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

- 一 公權停止ノ時
- 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死歿ノ日戰地等ニテ死歿ノ者ハ陸軍官憲ヨリ報告ノ日ヨリ一個年間願出サル者ハ其權利消絶ス

恩給及ヒ扶助料ハ一個年以上其金額ノ受領ヲ怠ル時ハ其怠リタル年間金額ハ之ヲ給セス

第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セシ日ヨリ三個月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ陸軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過タル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ陸軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス(本條一項二項及第十

一條一項六十八年第四號達加字)

戰鬪及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メニ傷痕若クハ疾病ヲ受ケ
一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於
テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルヲ能ハ
スシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ヒ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害
シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役
實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三
十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ
給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 免除恩給ハ下士及ヒ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ
年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痕若クハ疾病ノ爲メ免官若
クハ免役スル者ニ之ヲ給ス

前條第二項ニ掲グルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク
兵役ニ堪ヘズ其證據明亮ニシテ免官若クハ免役スル者ハ服役實期
十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス

其免除恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙
號表面ノ如シ但十一年未滿者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額
ニ依ル

第十二條 准士官以上傷痕ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職
スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官
等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候トモ詳細
之ヲ開陳ス可シ

第十四條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若
クハ査問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ

第十五條 傷痕疾病不治ノ狀ハ陸軍病院長及ヒ主任醫官(地方病院
ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長並ニ主任醫師)ノ診斷證書ヲ以テ
之ヲ證ス可シ

其診斷證書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治
ノ狀ヲ詳悉ス可シ

病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ陸軍病院長若クハ地方病院長ノ診断書ヲ要ス

第十六條 傷痍疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該所管ニ於テ檢査判定シ尙ホ監軍部長ノ審査ヲ經テ之ヲ陸軍卿ニ移ス可シ陸軍卿ハ更ニ軍醫本部ニ下シテ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十七條 恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但下士以上其官階ニ進ミ未タ進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラスシテ退職免官ヲ願フ時ハ前官ニ準シテ之ヲ給ス其戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ或ハ戰地ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第十八條 准士官以上退職恩給ヲ願フ時所管長官ハ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命ス下士卒免除恩給ヲ願フ時亦該長官同上ノ日ニ於テ直ニ免官若クハ免役ス可シ

第十九條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ左ノ

各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者

二 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者

四 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷痍ヲ受ケシ者

第二十條 傷痍疾病ニ罹リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左項ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ更ニ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ル、ノ際其傷痍ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レ

シ日ヨリ貳箇年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十一條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死傷ノ緣故トニ依リテ差アリ

一 戦闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ヒ勤務ニ從事シ爲メニ發病死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シ死歿シタル軍人ノ寡婦

二 退職若クハ免除恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料ノ額第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十二條 戦闘及ヒ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因

セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十三條 戰鬥中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十一條第一項ヲ適用ス

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子ソレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ限ル

第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戶籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラズ家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ婦ト等シキ扶助料其他ノ

者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十七條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戶籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權利消絶ス

第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラル、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉ノ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖

父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リテ之ヲ轉給ス可シ

但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ廢疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニノ且孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其戶籍ニ在ル者ニ限ル

第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戶主二名連署シ其郡區長戶長ノ與印セル願書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ呈ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見證書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痍疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ

但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死没ノ原因ヲ證明ス可シ

第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ

總テ同月ヲ以テ始トス

但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス

三 徵兵ノ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス

四 壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス

五 上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願書該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ終期トス

六 下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十二條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス

士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル

時間ハ之ヲ除算ス

第三十三條 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍軍人トナリタル者並ニ陸軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受クル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス

第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集スルコトアル時ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セズ

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ增加ス
- 二 出征軍ヲ編入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セズ日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リシ時ハ一箇年ヲ增加ス
- 三 海戰ニ當リ海岸防禦ニ從事セシ時ハ半箇年ヲ增加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ

分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ檢閱監軍部長ヲ經テ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス

寡婦(孤兒)扶助料ノ願書ハ居住地地方廳ヨリ內務卿ニ呈シ內務卿之ヲ陸軍卿ニ移シ陸軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏陸軍三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ免除恩給並ニ給助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 准士官以上ハ計算書日附ノ翌日
- 二 下士卒ハ免官免役ノ翌日

三 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期日ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ収メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メズ更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ內務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖モ第十九條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痍疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 四 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者

ニ依リ生活セル二十歳未満又ハ二十歳以上ト雖モ廢疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル給助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ請願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤績キノ後能役或ハ免官トナリ恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ乙號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セズ(明治十七年四月第三十七號達改正)

陸軍恩給金額表

甲號 退職恩給表

年	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等
十一年	千五百四十	千二百四十	千五百四十	七百五十	六百	四百五十	三百	二百二十五	百八十	百五十
十二年	千五百二十五	千二百五十	千五百二十五	七百五十五	六百五	四百五十五	三百五	二百三十五	百八十三	百五十五
十三年	千五百五十四	千二百四十四	千五百五十四	七百七十五	六百二十	四百六十五	三百十	二百三十五	百八十六	百五十五
十四年	千五百七十五	千二百六十四	千五百七十五	七百九十五	六百三十	四百七十五	三百十五	二百四十四	百八十九	百五十五
十五年	千六百	千二百八十四	千六百	八百	六百四十	四百八十	三百二十	二百四十四	百九十二	百六十
十六年	千六百二十五	千三百	千六百二十五	八百二十五	六百五十五	四百八十五	三百三十五	二百五十五	百九十五	百六十五
十七年	千六百五十四	千三百一十	千六百五十四	八百七十五	六百六十五	四百九十五	三百四十五	二百六十五	百九十八	百六十五
十八年	千六百七十五	千三百三十	千六百七十五	八百九十五	六百七十五	五百	三百五十五	二百七十五	百一	百七十五
十九年	千七百	千三百五十	千七百	九百	六百八十	五百一十	三百六十五	二百八十五	百七	百七十五
二十年	千七百二十五	千三百六十	千七百二十五	九百二十五	六百九十	五百二十	三百七十五	二百九十五	百七	百七十五
二十一年	千七百五十	千三百八十	千七百五十	九百七十五	七百	五百三十五	三百八十五	三百一十	百七	百七十五
二十二年	千七百七十五	千四百	千七百七十五	九百九十五	七百一十	五百五十五	三百九十五	三百三十	百七	百七十五
二十三年	千八百	千四百二十	千八百	一千	七百二十	五百七十五	四百	三百四十	百七	百七十五
二十四年	千八百二十五	千四百四十	千八百二十五	一千二十五	七百四十	五百九十五	四百一十	三百五十五	百七	百七十五
二十五年	千八百五十四	千四百六十	千八百五十四	一千四十五	七百五十五	六百一十	四百二十	三百六十五	百七	百七十五
二十六年	千八百七十五	千四百八十	千八百七十五	一千六十五	七百七十五	六百三十	四百四十	三百七十五	百七	百七十五
二十七年	千九百	千五百	千九百	一千八百	八百	六百五十	四百六十	三百九十五	百七	百七十五

四	三	三	三	三	三	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	九	八	七
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
級 五				級 四				級 三				級 二							
百二十圓百八圓九十六圓七十二圓				百五圓九十四圓五十錢八十四圓六十三圓				九十圓八十一圓七十二圓五十四圓				七十五圓六十七圓五十錢六十圓四十五圓							

第一編行政 第一類官制 陸軍恩給令

乙號 免除恩給表

十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
六	五	四	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
級 一																			
六十圓五十四圓四十八圓三十六圓																			
四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
免除恩給表 (Detailed numerical data for each grade and year)																			

丙 號 負傷增加恩給表

項	一	二	三	四	五	六	丁 號	戊 號	己 號
一等	千五百円	千二百円	千五百円	千二百円	千五百円	千二百円	千八百円	千七百円	千五百円
二等	八百四十円	七百二十円	八百四十円	七百二十円	八百四十円	七百二十円	八百四十円	七百二十円	六百六十円
三等	七百五十円	六百三十円	七百五十円	六百三十円	七百五十円	六百三十円	七百五十円	六百三十円	五百五十円
四等	五百五十円	四百三十円	五百五十円	四百三十円	五百五十円	四百三十円	五百五十円	四百三十円	三百五十円
五等	四百五十円	三百三十円	四百五十円	三百三十円	四百五十円	三百三十円	四百五十円	三百三十円	二百五十円
六等	三百五十円	二百三十円	三百五十円	二百三十円	三百五十円	二百三十円	三百五十円	二百三十円	二百五十円
七等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
八等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
九等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
十等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
十一等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
十二等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
十三等	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円
諸卒	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	二百五十円	一百三十円	一百五十円

第二節ノ二 陸軍恩給令付則

○明治十八年七月太政官第四拾號達

陸軍恩給令附則左ノ通相定候條此旨相達候事

陸軍恩給令

- 第一條 屯田兵ノ恩給ハ左ノ各條ニ據ル可シ
- 第二條 屯田兵上長官士官ノ恩給并ニ其寡婦孤兒等ノ扶助料ハ凡テ本令ニ據リ支給ス
- 第三條 屯田兵下士ノ内北海道ニ移住ノ節定規ノ給助ヲ受ケサル者ニアリテハ總テ本令ニ據リ各種ノ恩給ヲ支給ス
- 第四條 屯田兵下士卒ニノ定規ノ給助ヲ受ケサル者ニアリテハ服役年ノ爲メニ恩給ヲ受クルノ權ナシト雖モ戰鬪或ハ戰時平時ニ拘ラヌ軍隊勤務中公務ノ爲メ死没又ハ傷痍疾病ヲ受ケ職務ニ堪サルニ至リ其證據明亮ニノ免官免役スル者ハ凡テ本令ニ據リ各種ノ恩給ヲ支給ス但免除恩給ハ服役年數ニ關セズ十一年ニ等シキ額ヲ給ス
- 第五條 北海道ニ移住ノ節定規ノ給助ヲ受ケサル者ノ服役年計算ハ

本令ニ據ル可シト雖モ給助ヲ受ケシ下士卒ヨリ出身ノ士官ハ就任ノ日ヨリ起算ス可シ

第六條 屯田兵上長官士官下士ノ現役ヲ辭シテ恩給ヲ受クルノ例ハ本令第三條憲兵ノ年齢ニ準ス

○明治十八年九月太政官第四拾九號達

陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルトキハ同令第六條第一項ニ準シ扶助料ヲ受クル者同上ノトキハ同令^{陸軍ハ第二十八條 海軍ハ第二十九條}ニ準スヘキ儀ト可心得此旨相達候事
但明治八年^{四月}第四拾八號達陸軍武官傷痕扶助死亡ノ者祭葬家族扶助概則及同年^{八月}第百四拾八號達海軍退隱令ニ據リ扶助料若クハ退隱料ヲ受クル者モ本文ニ準スヘシ

第二節ノ三 海軍恩給令

○十六年九月第三十八號達

海軍恩給令別冊ノ通相定候條此旨相達候事

但從前ノ海軍退隱令ハ廢止ス

○太政官令 海軍省令 海軍令
儀ニ付シテ 儀ニ付シテ 儀ニ付シテ
武官論セシ 武官論セシ 武官論セシ
免後若ハ 免後若ハ 免後若ハ
役ノ後若ハ 役ノ後若ハ 役ノ後若ハ
軍人トシテ 軍人トシテ 軍人トシテ
前ハ恩給トシ 前ハ恩給トシ 前ハ恩給トシ
通算シテ 通算シテ 通算シテ
恩給令ノ 恩給令ノ 恩給令ノ
明令之 明令之 明令之
軍令外ニ 軍令外ニ 軍令外ニ
五條ノ 五條ノ 五條ノ
聊カ疑義ニ 聊カ疑義ニ 聊カ疑義ニ
下取上ニ 下取上ニ 下取上ニ
生シ候條ニ 生シ候條ニ 生シ候條ニ
御指相成度此

海軍恩給令

海軍恩給令目錄

- 第一章 總則
- 第二章 恩給及ヒ増加
- 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
- 第四章 服役年算則
- 第五章 從軍年算則
- 第六章 恩給支給順序
- 第七章 賑恤金
- 第八章 扶助金

第一章 總則

第一條 海軍恩給ハ海軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス
一 退職恩給

段相 明治十七年十月一日
 指合 二年十一月十日
 前官受ノ趣ナル者ノ金
 年數ハ通算スルノ
 キモハ内官ノ後
 三十日以内ノ再
 任及ヒ廢官ノ
 應依リ事務取
 撥中再任者ノ前
 官年數ニ限ル儀
 可心得事ル儀

- 二 退役恩給
 - 三 寡婦(孤兒)扶助料
 - 四 賑恤金
 - 五 給助金
 - 第二條 退職恩給退役恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス
 - 第三條 軍人ハ年限ノ年齢ニ達スレハ退職退役シテ恩給ヲ受クルヲ例トス此定限左ノ如シ
 - 軍醫大監 主計大監 六十五
 - 機關大監 機關中監 軍醫中監 軍醫少監 六十
 - 主計中監 主計少監 六十
 - 大佐 中佐 機關小監 大軍醫 中軍醫 大主計 五十五
 - 中主計 兵曹上長 木工上長 機關工上長 五十五
 - 兵曹長 木工長 機關工長 樂長 五十五
- (以上二行及第三十二條ノ一十七年九月第七十六號達改正)

- 少佐 大機關士 中機關士 少軍醫 少主計 下士 五十
- 大尉 中尉 少機關士 卒 四十五
- 少尉 軍醫補 主計補 四十
- 小尉補 機關士補 三十
- 第四條 軍人年限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特抜又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ尙ホ留任ヲ命スルヲアル可シ但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限ニアラス
- 第五條 軍人未タ年限ノ年齢ニ達モスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪ヘサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ
- 第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

 - 一 公權停止ノ時
 - 二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時
 - 三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日（戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲ヨリ報告ノ日）ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以上其金額ノ受領ヲ怠リタル時ハ其怠リタル間ノ金額ハ之ヲ給ス

第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セシ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ依リ查問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス（本條一項二項及第四十九條一ト乙號恩給表ノ表題ト十八年一月第五號達加字）
戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メニ傷痍若クハ疾病ヲ受ケ

一肢以上ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシテ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス
其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痍若クハ疾病ノ爲メ退職若クハ退役スル者ニ之ヲ給ス
前條第二項ニ掲グルカ如キ傷痍疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス
其退職退役恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコ

ト乙號表面ノ如シ但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル

第十二條 軍人傷痍ヲ受クルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職若クハ退役スル者ハ現官等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス

第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿へ卒ハ所管長官へ其履歷書ヲ副呈ス可シ

第十四條 傷痍疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ

第十五條 傷痍疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證證書又ハ公文若クハ查問會議口供書ノ寫ヲ以テ之ヲ證明ス可シ

第十六條 傷痍疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ主任醫官（地方病院ニ於テ治療ヲ受ケシ者ハ其院長並ニ主任醫師）ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證ス可シ

其診斷證書ハ傷痍疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治

ノ狀ヲ詳悉ス可シ

病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷證書ヲ要ス

第十七條 傷痍疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ證書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該ノ所管ニ於テ檢査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査委員ヲ選定シ更ニ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命シ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ

第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未タ滿十八箇月ニ至ラスシテ退職若クハ退役ヲ願フ時ハ前官ニ准シテ之ヲ給ス其戰闘又ハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ或ハ戰地若クハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第二十條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ左ノ

各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 両眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者
 - 二 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
 - 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
 - 四 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
 - 五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者
 - 六 前項ニ等シキ傷痕ヲ受ケシ者
- 第二十一條 傷痕疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ檢査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ル、ノ際其傷痕ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル
- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ一肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レ

シ日ヨリ二箇年

- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ両眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當

該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

- 一 戰鬪或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷痕ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞動及ヒ困苦ノ勤務ニ服シ爲メニ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染死歿シタル軍人ノ寡婦
- 二 退職若クハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ク可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十三條 戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痕ヲ受クルト雖モ其傷痕ニ原因セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十四條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十二條第一項ヲ適用ス

第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痕疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該軍人孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セラル養子ハ死傷前ノ養子ニシテ男女ニ拘ハラズ家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニ

ハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少ナル者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第三十條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可シ其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ

祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾及ヒ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ其孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十一條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ與印セシ願書ヲ以テ地方廳へ進達ス可シ但恩給登錄寫帖アレハ之ヲ添附ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ時ハ死亡報告若クハ死亡證書若クハ他ノ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痍疾病ニ起因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ詳細證明ス可シ海軍卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其事實ヲ調査セシメ以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 准士官以上ニテ三上長三長及ヒ樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日四上長四長及ヒ樂長以下ハ四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス

但准士官以上ハ明治四年八月以前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ准セサル以前ハ服役年ニ算入セス然レモ其以前ヨリ勤仕シタル者ハ其算入期ノ前月ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス

二 下士以上ハ退職年恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十三條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス
士官以上特命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス

第三十四條 陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナル者ハ陸軍服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シテ海軍軍人トナリタル者並ニ海軍々人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受ケシ恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス
第三十五條 退職若ハ退役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十年未滿ニシテ退身スル者ハ之ヲ加算セズ
第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ二箇年ヲ增加ス

二 出征艦隊ニ編入中及ヒ合圍若クハ臨戰地界内ニ服役中ハ一箇年ヲ增加ス

三 戰時平時ヲ論セズ外國航海ハ半箇年ヲ增加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニ非スノ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ海軍卿上請ノ從軍年ニ算入スルヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二個月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セズ但其一年以上ニ跨リ十二個月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ヨリ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス

寡婦若クハ孤兒扶助料ノ願書ハ居住ノ地方廳ヨリ內務卿ニ呈シ內務卿之ヲ海軍卿ニ移シ海軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大藏海軍ノ三卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經

テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證ト爲サシム
恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本
人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ退役恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ
依ル可シ

一 下士以上ハ計算書日付ノ翌日

二 卒ハ免役ノ翌日

三 寡婦若クハ兒孤ハ扶助料當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三個月分ノ金
額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給
登錄寫帖ヲ檢閲ノ上戸長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領書ト引
替ニ其金額ヲ交付ス可シ

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ
金額交付期月ノ三個月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ
過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地

方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ
還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時
ハ恩給登錄寫帖ヲ收メテ更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡
失スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ內務卿ヨリ證明書
ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戦闘或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ服役ニ
堪ヘヌ免官除隊スト雖モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ退職退
役恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一
箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ前項ト等シキ者ハ其官
階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一個年分ヨリ少カラス十箇年
分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニ非スシ

テ傷痍疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少ラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 軍人死歿シ扶助料ヲ受可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクソ從來死者ニ依リ生活セル廿歳未滿又ハ廿歳以上ト雖モ癩疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ救育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年ヨリ少ラス五箇年分ヨリ多ラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上服役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ己號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルノ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス(明治十七年四月第卅八號達改正)

海軍恩給金額表

甲 號 退職恩給表

年	官	等一	等二	等三	等四	等五	等六	等七	等八	等九	等十
廿七	年	千九百	千五百二十	千三百三十	九百五十	七百六十	五百七十	三百八十	二百八十五	二百二十八	百九十
廿六	年	千八百七十五	千四百八十	千三百	九百	七百	五百	三百七十	二百七十五	二百二十五	百八十五
廿五	年	千八百五十	千四百六十	千二百九十	八百七十	六百九十	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
廿四	年	千七百七十五	千四百四十	千二百六十	八百	七百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
廿三	年	千七百五十	千四百二十	千二百四十	七百七十	六百七十	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
廿二	年	千七百二十五	千四百	千二百二十	七百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
廿一	年	千七百	千三百八十	千二百	六百七十	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
二十	年	千六百七十五	千三百六十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十九	年	千六百五十	千三百四十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十八	年	千六百二十五	千三百二十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十七	年	千六百	千三百	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十六	年	千五百七十五	千二百八十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十五	年	千五百五十	千二百六十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十四	年	千五百二十五	千二百四十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十三	年	千五百	千二百二十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十二	年	千四百七十五	千二百	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十一	年	千四百五十	千一百八十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
十	年	千四百二十五	千一百六十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
九	年	千四百	千一百四十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
八	年	千三百七十五	千一百二十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
七	年	千三百五十	千一百	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
六	年	千三百二十五	千九十八	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
五	年	千三百	千九十六	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
四	年	千二百七十五	千九十四	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
三	年	千二百五十	千九十二	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
二	年	千二百二十五	千九十	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五
一	年	千二百	千八十八	千二百	六百	六百	五百	三百六十	二百七十五	二百二十五	百八十五

第一編行政 第一類官制 海軍恩給令

乙 號 退職及退役 恩給表

年 數	官 等	年	月	日	恩給 額
十 一	一 等	廿八	年	千九百五十五	千九百五十五圓
		廿九	年	千九百五十四	千九百五十四圓
		三十	年	千九百五十三	千九百五十三圓
		三十一	年	千九百五十二	千九百五十二圓
		三十二	年	千九百五十一	千九百五十一圓
		三十三	年	千九百五十	千九百五十圓
		三十四	年	千九百四十九	千九百四十九圓
		三十五	年	千九百四十八	千九百四十八圓
		三十六	年	千九百四十七	千九百四十七圓
		三十七	年	千九百四十六	千九百四十六圓
十 二	一 等	三十	年	千九百四十五	千九百四十五圓
		三十一	年	千九百四十四	千九百四十四圓
		三十二	年	千九百四十三	千九百四十三圓
		三十三	年	千九百四十二	千九百四十二圓
		三十四	年	千九百四十一	千九百四十一圓
		三十五	年	千九百四十	千九百四十圓
		三十六	年	千九百三十九	千九百三十九圓
		三十七	年	千九百三十八	千九百三十八圓
		三十八	年	千九百三十七	千九百三十七圓
		三十九	年	千九百三十六	千九百三十六圓
十 三	一 等	四十	年	千九百三十五	千九百三十五圓
		四十一	年	千九百三十四	千九百三十四圓
		四十二	年	千九百三十三	千九百三十三圓
		四十三	年	千九百三十二	千九百三十二圓
		四十四	年	千九百三十一	千九百三十一圓
		四十五	年	千九百三十	千九百三十圓
		四十六	年	千九百二十九	千九百二十九圓
		四十七	年	千九百二十八	千九百二十八圓
		四十八	年	千九百二十七	千九百二十七圓
		四十九	年	千九百二十六	千九百二十六圓

年	官 等	恩給 額
十七	二	七十圓
十八	二	六十圓
十九	二	六十圓
二十	二	六十圓
二十一	二	六十圓
二十二	二	六十圓
二十三	二	六十圓
二十四	二	六十圓
二十五	二	六十圓
二十六	二	六十圓
二十七	二	六十圓
二十八	二	六十圓
二十九	二	六十圓
三十	二	六十圓
三十一	二	六十圓
三十二	二	六十圓
三十三	二	六十圓
三十四	二	六十圓
三十五	二	六十圓
三十六	二	六十圓
三十七	二	六十圓
三十八	二	六十圓
三十九	二	六十圓
四十	二	六十圓

第一編行政 第一類官制 海軍恩給令

丙 號 負傷增加恩給表

項目	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
一	千五百四十八圓	千二百四十八圓	千零四十八圓	八百四十八圓	六百四十八圓	四百四十八圓	二百四十八圓
二	九百四十八圓	七百四十八圓	五百四十八圓	三百四十八圓
三	六百四十八圓	四百四十八圓	二百四十八圓
四	四百四十八圓	二百四十八圓
五	二百四十八圓
六

丁 號

戰闘及公務ニ因リ死亡者ノ寡婦(孤兒)扶助料表

戊 號

寡婦(孤兒)扶助料表

己 號

給助金表

等級	給助金
一等	千五百圓
二等	千二百圓
三等	千圓
四等	八百圓
五等	六百圓
六等	四百圓
七等	三百圓
八等	二百圓
九等	...
十等	...
十一等	...
十二等	...
十三等	...

第二節ノ三 武官恩給ノ支給

○十七年一月第四號達

陸海軍大將滿二年以上在官ノ者退職若クハ死亡スル時ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアルヘシ

陸海軍中將少將並ニ同等ノ軍人ニシテ特別ノ功績アル者ハ服役實期十一年未滿ト雖特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ

陸海軍武官ヨリ文官ヲ兼任スル者武官現役十一年以上十五年以上二十年以上ハ從軍年未滿ニシテ退官若クハ死亡スル時ハ陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ支給シ其現役滿十五年以上ノ者ニハ本兼官ノ内ニテ其俸給ノ多キ額ニ就テ恩給ヲ支給ス可シ

恩給金額ノ増加年數迄四十年及寡婦孤兒等ニ轉給スルコトハ總テ陸海軍恩給令ノ例ニ依ル

第二類 華族

○第一款

第一節 華族令

○十七年七月宮内省無號達

第一條 凡ッ爵ヲ授クルハ勅旨ヲ以テシ宮内卿之ヲ奉行ス

第二條 爵ヲ分テ公侯伯子男ノ五等トス

第三條 爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシム女子ハ爵ヲ襲グコ

トヲ得ス但現在女戸主ノ華族ハ將來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於

テ親戚中同族ノ者ノ連署ヲ以テ宮内卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ

第四條 嗣今有爵者又ハ戸主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキ

ハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ

第五條 有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及名稱ヲ享ク

第六條 華族戸主ノ戸籍ニ屬スル祖父母父母及妻及嫡長子孫及其妻

ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク

第七條 本人生存中相續人ヲシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス

但刑法又ハ懲戒ノ處分ニ由リ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特

旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此限ニ在ラス

第八條 華族ノ戸籍及身分ハ宮内卿之ヲ管掌ス

第九條 華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ッ宮内

卿ノ許可ヲ受クヘシ

第十條 華族ハ其子弟ヲシテ相當ノ教育ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フ

ヘシ

第二節 華族懲戒例

○十八年一月太政官號外達

第一條 華族ノ品位ヲ保護スル爲ニ懲戒處分ノ例ヲ設ク

第二條 華族懲戒ノ權ハ之ヲ宮内卿ニ委任シ上裁ヲ得テ處分ヲ行ハ

シム

第三條 公ニ風教ヲ亂リ又ハ家産ヲ浪費シ華族ニ必要ナル品位ヲ失

フ者ハ懲戒ノ處分ヲ行フヘシ但隱微曖昧ノ事ハ懲戒ノ限ニ在ラス

第四條 懲戒ヲ分テ三種トス

第一 譴責

第二 謹慎

第三 除族

第五條 譴責ハ宮内卿ヨリ譴責書ヲ付シ戒悔スル所アラシム

第六條 謹慎ハ十日以上一年以下外出ヲ禁シ自宅ニ於テ謹慎ヲ守ラシム

第七條 失行重大又ハ懲責ヲ受ケ猶ホ悔改ノ跡ナク華族ニ必要ナル品位ヲ有ツコト能ハサル者ハ其族ヲ除クヘシ

此條ハ刑法第三十一條ト相抵觸スルコトナシ

第八條 前條ノ場合ニ於テ情輕キ者ハ子孫又ハ他ノ親屬ヲシテ爵ヲ襲カシムヘシ親屬ナキ者ハ家ヲ除ク

第九條 華族ノ戸主ハ其子弟及家屬ヲ檢束スルノ責ヲ負フヘシ

第十條 華族ノ戸主幼年ナル者ハ後見人代テ其子弟及家屬ヲ檢束スルノ責ヲ負フヘシ

第十一條 華族ノ子弟及家屬ニシテ第七條ニ當ル者ハ其身ノミ華族ノ屬籍ヲ除クヘシ

第十二條 華族ノ犯罪輕罪以上ニ觸ル、者ハ司法ノ裁判ヲ經タル後其情狀ニ從ヒ更ニ懲戒ノ處分ヲ行フヘシ

第十三條 前條ノ場合ヲ除ク外懲戒處分ヲ行フニハ豫メ本人ニ通知シ其事情ノ審問ヲ必要トシ又ハ本人ヨリ審問ヲ請求スルトキハ宮内卿ハ上旨ヲ得テ華族五人ヲ撰任シ審問委員トナシ審問シテ狀ヲ具ヘ上申セシムヘシ

第七條第十一條ノ場合ニ於テハ本人ノ請求スルトセサルトニ拘ラズ審問ヲ經ルヲ必要トス

第十四條 審問委員ハ宮内卿ヨリ下付シタル事件ノ外ニ涉リ審問スルコトヲ得ス

第十五條 華族ノ犯罪司法ノ裁判ヲ經放免セラレタル者仍ホ其情狀ニ從ヒ懲戒ノ處分ヲ行フコトアルベシ

第十六條 華族懲戒ノ處分ハ不服ヲ以テ太政官ニ請願シ又ハ裁判所ニ控訴スルコトヲ得ス

第十七條 華族懲戒ノ處分ヲ受ケタル者ハ宮内卿ヨリ警察官ニ通知シ將來ノ行儀ヲ監察セシム

第十八條 除族ノ處分ヲ受ケ情輕キ者悔改ノ事實アルトキハ五年ノ

後上旨ニ由リ復族セシムルコトアルヘシ
除族情重ク親屬襲爵ヲ得サル者十年ノ後上旨ニ由リ親屬ニ襲爵ヲ
命スルコトアルヘシ但本人ハ終身復族ヲ許サス

第三類 叙勳褒賞

○第一章 叙勳

第一節 叙勳條例附同附則

○明治十八年七月太政官第四拾三號達

明治十六年一月第一號達叙勳條例中左ノ通改正候條此旨相達候事

第二條 第一項

文武官數年勳勞アル者ハ其成績ヲ勘査シ左表ニ照シ勳等ニ叙
ス其初叙勳任官ハ勳三等奏任官ハ勳六等判任官ハ勳八等ヨリ
ス尙ホ勳勞年數ヲ累サヌルニ由リ進叙スルコト得然レハ判官
ハ十四等官并其相當官以下ハ勳七等ニ進ムヲ得ヌ又十等官並
其相當官以下ハ勳六等ニ進ムヲ得ヌ奏任官ハ六七等官並其相
當官ハ勳三等ニ進ムヲ得ヌ又八九等官並其相當官ハ勳四等ニ

進ムヲ得ヌ勳任官ハ三等官並其相當官ハ勳一等ニ進ムヲ得ヌ
初叙並進級例中勳任初叙滿五年以上トアルヲ滿八年以上ト改メ
判任以下トアルヲ判任ト改ム

第五條 一月トアルヲ二月ト改ム

第七條 四月トアルヲ五月ト改ム

○明治十八年七月太政官號外

明治十六年一月四日達叙勳條例附則中左ノ通改正候條此旨相達候事
第三款中四月トアルヲ五月ト一月トアルヲ二月ト三月トアルヲ四
月ト改ム

履歷明細書式第二ノ官位苗字名ノ左側ニ左ノ通追加ス

現住所 何府縣何國何區郡何町村何番地

○十六年一月第一號達

第一條 叙勳條例ハ文武官ノ勳勞アル者ヲ叙シ及ヒ進級セシムルノ
例ナリ

但臨時勳功ニ依テ叙スルハ本例ノ限ニアラス

第二條 文武官數年勳勞アルモノハ其成績ヲ勘査シ左表ニ照シテ勳等ニ叙ス其初叙勳任官ハ勳三等奏任官ハ勳六等判任官以下ハ勳八等ヨリス尙ホ勳勞年數ヲ累サヌルニ由リ進級スルコトヲ得然レモ判任官ハ十四等官並十四等相當官以下ハ勳六等ニ進ムヲ得奏任官ハ七等官並ニ七等相當官以下ハ勳三等ニ進ムヲ得奏任官ハ三等官並ニ三等相當官ハ勳一等ニ進ムヲ得ス○大臣參議諸省卿參事院元老院議長陸海軍大將ノ勳一等ニ叙スルハ進級年例ノ限リニアラス○陸海軍下士ノ初叙ハ滿十年以上トス

初叙並ニ進級例

奏任	勳一等	勳二等	勳三等	勳四等	勳五等	勳六等	勳七等	勳八等
	進	進	初叙	進	進	初叙	初叙	初叙
勅任	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上
	滿十年	滿十年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年
奏任	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上
	滿十年	滿十年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年

第三條 臨時勳功若シハ特旨ニ依テ叙セラレタル者モ本例ニ依リ進級セシムル年金ヲ受領スルモノハ別段ノ恩命アルニ非サレハ引續キ前級ノ年金ヲ賜フ

第四條 四等以下ノ勳章ヲ有スルモノ勅任官トナリ七等以下ノ勳章ヲ有スルモノ奏任官トナリタル時ハ進級年數ノ五分一以上ニシテ勳三等又ハ勳六等迄進級スルヲ得

第五條 文武官ノ勳等ニ叙スヘキ勳勞者アル時ハ各廳ニ於テ本人ノ履歷明細書ヲ作り其長官ノ證認狀ヲ副ヘ毎年一月又ハ八月限リ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

但地方官ノ叙勳スヘキ者ハ内務卿ヨリ之ヲ申牒スヘシ

第六條 賞勳局總裁ハ各廳ノ申牒ヲ檢閲審査シ議定官ノ會議ヲ開キ其當否ヲ論定シ以テ奏ス

判任	進	進	初叙	進	進	初叙	初叙
以下	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上
	滿十年	滿十年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年	滿五年

第七條 勳章授與式ハ毎年四月十一月ノ二回ニ執行ス

但臨時叙勳ハ此限ニアラス

○十六年一月第二號達 叙勳條例附則

叙勳條例ハ叙勳進級ノ綱領ナリ故ニ其節目ヲ左ニ掲ク

第一款 叙勳條例第二條中進級例圖ニ列記スル官等區分年數期限ハ

積年ノ勳勞者ヲ待ツノ所以ナリ故ニ縱令表中ノ年數期限ニ至ルモ

其成績勳勞ノ證據ヲ與フルニ不充分ナル者ハ之ヲ中牒スルヲ得ス

第二款 履歷明細書ハ檢閱ニ便スル爲メ表ヲ製シ任免陞降叙位賞罰

ノ要領ヲ掲ケ尙ホ内地出張外國派遣又ハ職務ノ分課委員等ヲ別紙

ニ詳記シ以テ其經歷ヲ明ニスヘシ

第三款 勳章授與式ハ毎年四月及十一月ニ執行スルヲ以テ一月又

ハ八月ヲ限リ叙勳中牒スト雖モ其履歷明細書ニハ豫メ三月盡日又

ハ十月盡日マテノ算數ヲ記載スヘシ若シ中牒ノ後授與以前ニ於テ

轉免陞降或死亡ノ者アル時ハ速ニ其理由ヲ賞勳局ニ通知スヘシ

但勳位進級ニ係ル者ハ初叙以後ノ履歷ノ式ニ依リ記載スヘシ

第四款 勤務ノ年數ハ勅任官ハ勅任タルノ日ヨリ奏任官ハ奏任タル

ノ日ヨリ判任官以下ハ判任官以下タルノ日ヨリ起算ス然レモ等外

ヨリ判任トナリ又ハ判任ヨリ奏任トナリ又ハ奏任ヨリ勅任トナリ

タル者ハ各其前任ノ年數ヲ其後任ノ半數トシテ通算スルヲ得

但出仕ハ本官ニ同シ又準勅奏判御用掛ハ各本任ヨリ三分一折減

シテ勤務年數ニ計算スルヲ得雇ノ名義タル時間ハ算入セス

第五款 年月ノ計算ハ一年ハ滿十二月ヲ以テシ(舊曆ノ閏月ハ除

ク)一月ハ十五日ヲ以テ區別ス例ハ任官十五日前ニ在レハ滿一月

ニ算シ十六日後ニ在レハ半月ニ算シ免職ノ時ハ之ニ反ス

第六款 免職又ハ廢官ノ後再任スル者ハ前後奉職年數ヲ通算スルヲ

得但勳位進級ニハ之ヲ通算セス其刑法ニ觸レ又ハ懲戒例ニ照シ

免職シタル者ハ再任スルト雖モ渾テ前ノ奉職年數ヲ通算スルヲ得

ス

第七款 文官本屬長官ノ懲戒ヲ受ケ罰俸一箇月半以下ヲ科セラル、

トキハ勤務年數半年ヲ減算シ罰俸二ヶ月以上ヲ科セラル、トキハ

一ケ年ヲ減算ス再度以上皆此ノ例ニ準ス譴責ハ拘ハラズ
舊刑法ニ觸レ謹慎閉門降官又ハ贖罪罰俸ニ處セラレタル者ハ左ノ
例ニ照シテ減算スヘシ

但武官ノ減算法ハ陸海軍省ニ於テ別段ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

刑名	刑期	減算年數
謹慎又ハ贖罪	二十日以上 <small>但十日以下ハ除算スルノ限ニアラス</small>	半年
閉門又ハ贖罪	五十日以上	一年
降官		一年半
罰俸	五ヶ月以下	一年半
同	六ヶ月以上	二年

證認狀書式 (用紙美濃紙)

某官某名義出身(或ハ叙勳何等)以來數官ヲ歷任(或ハ本衙ニ精勤)シ何
年以上ニ至リ勳勞尠ナカラス就中某局課(長)何部何課ヲ擔任若クハ
兼務スルコト久シク(或ハ臨時某事件ヲ擔任シ處分宜ヲ得)其成績顯
著タルヲ確認シ因テ例ニ據リ式ニ照シ履歷明細書ヲ具シ及申牒候也

年號月日

賞勳局總裁某名殿

某官某名印(本屬長官)

○明治十八年七月海軍省丙第四拾三號達

叙勳條例附則第七款但書ニ因リ海軍武官勤務年數減算法左之通相定

△此旨相達候事

叙勳條例附則第七款但書ニ據リ海軍武官勤務年數減算法ヲ定ムル

左ノ如シ

一陸海軍刑法輕禁錮并ニ海軍懲罰令及ヒ舊海陸軍刑律閉門錮同增加
條例謹慎並ニ舊海軍下士以下懲罰則ニ處セラレタル者ハ左ノ例ニ
照シテ在職及ヒ服役年數ヲ減算ス

陸海軍刑法ニ處セラレタル者ノ減算例

刑名	刑期	減算年月
	十一日	六箇月
	一月	九箇月
	三月	一年以上

輕	禁	錮	六月	以上	一年六箇月
			九月	以上	二年
			一年	以上	三年
			一年六月	以上	四年
			二年	以上	五年
			二年六月	以上	六年

但其刑期三年ヨリ超過スルキハ其超過ノ現日數ヲ二倍シテ減算ス
 一下士ニシテ普通刑法ノ輕禁錮ニ處セラレタル者ノ減算ハ總テ前例
 ニ同シ普通刑法及ヒ陸海軍刑法ノ重禁錮ニ處セラレタル者ハ其處
 刑以前ノ服役年數ヲ通算スルヲ得ス
 海軍懲罰令ニ處セラレタル者ノ減算例

將校准將校 及ヒ准士官	罰目罰期	下士罰目罰期	減算	月
重謹慎	十一日以上	重監倉	十一日以上	三箇月
輕謹慎	廿一日以上	輕監倉	廿一日以上	三箇月

但監倉ニ處ス可キ者禁足ニ換フルキト雖モ猶本罰ノ日數ニ因テ減

算ス

舊海陸軍刑律及ヒ同増加條例ニ處セラレタル者ノ減算例

將校准將校 及ヒ准士官	刑名刑期	下士刑名刑期	減算年月
閉門	三十五日	錮	二十八日
同	四十九日	同	三十五日
同	九十八日	同	四十二日
謹慎	十五日以上	謹慎	十五日以上

但謹慎ヲ錮ニ換フルキト雖モ猶謹慎ノ日數ニ因テ減算ス
 舊海軍下士以下懲罰則ニ處セラレタル者減算例

下士	罰目	罰期	減算	月
禁錮		十一日以上	三箇月	

一舊海陸軍刑律ニ依リ將校准將校及ヒ准士官ハ降官以上下士ハ降等
 以上ノ刑ニ處セラレタル者ハ其處刑以前ノ在職及ヒ服役年數ハ通
 算スルヲ得ス
 一舊常律ニ據リ處分セラレタル者ハ叙勳條例附則第七款ニ掲クル減

算法ニ從フ

一賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者ハ其處分以前ノ在職及ヒ服役年數ハ通算スルヲ得ス

一此減算法ニ掲クル日數以下ハ減算スルノ限ニ在ラス

履歷明細書式其二 (用紙美濃罨紙)

年號月日

官位 苗 字 名

一某局長被仰付候事或ハ(某課長被免候事某分課差免候事官衙ノ名以下倣之)

但シ達書全文ヲ記載スヘシ以上倣之

年號月日

一叙某位或ハ位記返上被仰付候事

年號月日

一某委員被仰付候事或ハ(差免候事(兼務)被仰付候事其掛專務)

年號月日

一某國或ハ某地へ出張被仰付候事(外國行ノトキハ發程及歸朝ノ月日ヲ記載スヘシ)

年號月日

一賞典

但賞詞及賜金賜物ノ件數ヲ明載スヘシ

年號月日

一責罰

但罰文刑名ヲ明載スヘシ

備考

明治二年己巳七月以前ハ勅奏判任ノ區分名稱アルコナシ然レモ履歷ヲ調査スルニ方ツテハ元年二月新正ノ職制ニ於テハ八局ノ判事以上ヲ勅任權判事ヲ奏任筆生ヲ判任トシ同年閏四月創正ノ政體ニ於テハ三等官以上ヲ勅任五等官以上ヲ奏任六等官ヨリ九等官マテ判任ト視テ記載スヘシ且當時藩士等ヲ撰用スルニ五等官以上ニハ徵士ト命シ六等官以下ニハ御雇ノ字ヲ冒ラスヲ例トス叙勳條例附則第四款但書雇ノ名義タルモノト混同スル勿レ

明治四年七月廢藩以前藩職ヲ爲シ並同年十一月府縣改置以前縣務

(廢藩ノ際大參事以下是迄ノ通事務取扱ヲ命セラレシモノ)ヲ奉シタル時間ハ除算スヘシ

但維新ニ置カレタル奈良兵庫大津笠松神奈川新潟等ノ府縣ハ此限ニアラス

第二節 勳章年金褫奪停止

○十六年六月第二十二號布告

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受クルコトヲ得ス

第二節ノ二 同取扱手續

○十六年九月第三十九號達

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ該ル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ該ル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 懲戒例及免職條例ニヨリ免官シタル者

第三項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 勳章ヲ有スル者ニハ先ツ其勳章勳記年金票佩用免許狀ヲ褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノトス

第三條 第一條第一項ニ觸ル、者アルトキハ裁判管轄長官ヨリ司法

卿又ハ海軍卿ヲ經由シテ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 第一條第二項第三項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第五條 賞勳局總裁ハ其具狀ヲ審査シ重禁錮以上ノ刑ニ該ル者ハ直

ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑又ハ第一條第二項第三項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ依テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スベキ者ハ奏請ス

第六條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官
ヘ通知スヘシ

第七條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ
年金票モ亦同シ

第八條 褫奪シタル勳章勳記年金票佩用免許狀ハ褫奪ヲ行ヒタル官
廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ

第九條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ
其年月日及ヒ事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法卿又ハ陸海軍卿ヲ經由
シテ賞勳局總裁ヘ具中スヘシ

但公訴權消滅スルカ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦之ヲ
申告スヘシ

○第二章 褒章

第一節 褒章條例

○十四年十二月第六十三號布告

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナ

ル者(孝子順孫節婦義僕ノ類)又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル
者(疏河築隄修路墾田ノ業或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フ)ヲ表彰ス
ル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章 右自己ノ危難ヲ顧リミス人命ヲ救助セシモノニ賜フモ
ノトス

綠綬褒章 右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章 右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フ者トス

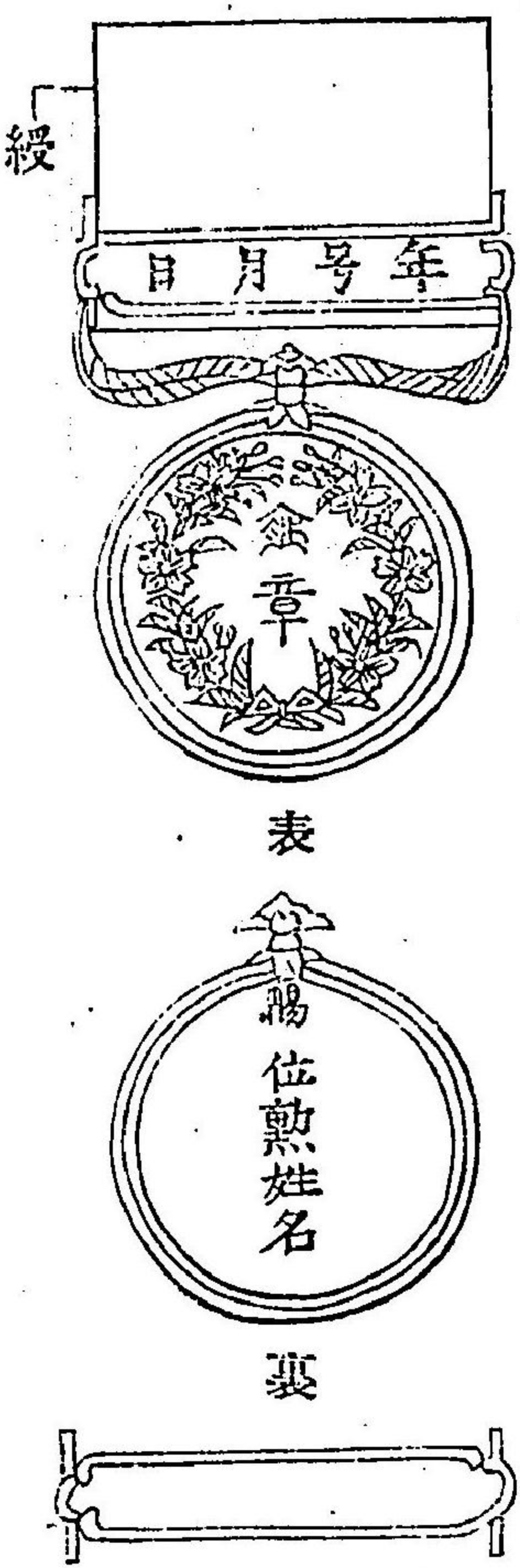
第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノ
ハ褒狀ヲ與フコアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章
ヲ賜フヘキモハ其都度飾版一個ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以
テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レ
モ重罪ノ刑ニ處セラレタルモハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同
上ノ刑ニ處セラレタル者ハ之ヲ授與セス

褒章ノ圖

章	銀櫻花紋圓形徑九分
鈕并飾版	銀
綬	幅一寸 種類ニヨリ紅綠藍三色ノ別アリ



佩用式
一褒章ハ左肋ノ邊ヘ佩フヘシ
但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶フヘシ

第一節ノ二 同取扱手續

○十四年十二月第百三號達

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅委任官並ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキハ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私儲ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅委任官並ニ從

○内務省章
褒狀
兵庫縣ヨリ
授與セシ者
名届方ノ儀ニ付

本 月 十 日 御 兩 省 乙
 第 三 十 五 號 授 與
 客 年 中 之 狀 名 限
 來 八 月 三 十 日 限
 可 屆 出 旨 達 七 日
 未 段 出 授 者 七 日
 者 狀 同 樣 可 心 得
 褒 狀 中 略 與 末 段
 者 狀 何 授 與 末 段
 指 稱 何 儀 哉 聊 了
 御 兼 候 仰 候 此 段
 御 示 候 仰 候 此 段
 (指 令) 十 六 年 七 月 廿 五 日
 日 十 六 年 七 月 廿 五 日
 五 年 中 之 現 出 金
 者 該 指 稱 候 儀 出 金
 シ 該 指 稱 候 儀 出 金
 褒 狀 與 內 實 際
 サ 儀 取 得 事
 候 儀 取 得 事

六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

第一節ノ三 金穀財産等寄附

○十六年一月第一號布告

明治十四年(十二月)第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ハ金銀木杯若シハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

第二節 金銀木杯金圓賜與手續

○十六年三月第十七號達

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フキハ其等差左ノ如シ

定例

第一等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス

第二等 木杯三組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五十錢ヨリ少カラス

第三等 木杯一組(品格ヲ三等ニ分ツ)又ハ金二圓ヨリ多カラス一圓ヨリ少カラス

但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ

又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フキハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格

拾圓未滿

褒狀

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ(十七年二月

第二十二號達但書追加)

拾圓以上百圓未滿

木杯壹個

但五十圓未滿ハ拾圓毎ニ五十圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿 木杯三組

但シ三百圓未滿ハ五十圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上貳千圓未滿 銀杯壹個

但シ千圓未滿ハ二百五十圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

貳千圓以上五千圓未滿 銀杯三組

但シ千圓毎ニ品格ニ等差アリ

五千圓以上一萬圓未滿 金杯壹個

但二千五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

一萬圓以上 金杯三組

第三條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス

褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス

但勅奏任官並從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニ賜フヘキハ第四條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅奏任官並ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未ダ授與セサル前重罪ニ處セラレタルハ之ヲ授與セス

第四類 教育宗教

第一章 教育

第一節 教育令

○明治十八年八月第貳拾三號布告
 明治十三年^{十二}月 第五拾九號布告教育令左ノ通改正ス
 但明治十四年^七月 第三拾八號布告中教育令第九條トアルヲ教育令第
 八條ト改メ同十五年^{十二}月 第五拾六號布告ヲ廢止ス
 右奉 勅旨布告候事

教育令

- 第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校教場幼稚園書
 籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘシ
- 第二條 學校ハ小學校中學校大學師範學校專門學校其他各種ノ學校
 トス
- 第三條 小學校及小學教場ハ兒童ニ普通ノ教育ヲ施ス所トス
- 第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス
- 第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス
- 第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス
- 第七條 專門學校ハ法科理科醫科文科農業商業職工等各科ノ學ヲ授ク

ル所トス

第八條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡
 兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校又ハ小學教場
 ヲ設置スヘシ

但本文小學校又ハ小學教場ニ代ルヘキ私立小學校又ハ小學教場
 アリテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ケ
 ナシ

第九條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十一條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ普通科ヲ卒業ラサル間已ムヲ
 得サル事故アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經
 ヘシ

第十二條 小學校及小學教場ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下タルヘ
 ヲ授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ其授業時間ハ一日三時

ヨリ少カラス六時ヨリ多カラサルモノトス

但土地ノ情况ニ依リ午前若クハ午後ノ半日又ハ夜間ニ授業スル
コトヲ得ヘシ其授業時間ハ二時ヨリ少カラサルモノトス

第十三條 小學校若クハ小學教場ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡
回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ施サントスル町村ハ府知事
縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十四條 學齡兒童ヲ小學校若クハ小學教場ニ入レス又巡回授業ニ
依ラスシテ別ニ普通教育ヲ施サントスルモノハ戶長ノ認可ヲ經ヘ
シ

但戶長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校若クハ小學教場ニ於テ試
驗セシムヘシ

第十五條 學校教場幼稚園書籍館等ニ公立私立ノ別アリ地方稅若ク
ハ町村ノ公費ヲ以テ設置セルモノヲ公立トシ一人若クハ數人ノ私
費ヲ以テ設置セルモノヲ私立トス

第十六條 公立學校教場幼稚園書籍館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ

係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ其町村立ニ係ルモノハ府知事縣
令ノ認可ヲ經ヘシ

第十七條 私立學校教場幼稚園書籍館等ノ設置變更ハ府知事縣令ノ
認可ヲ經ヘシ其廢止ハ府知事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校又ハ小學教場ニ代用スル私立小學又ハ小學教場ノ
廢止ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十八條 町村立私立學校教場幼稚園書籍館等設置變更廢止ノ規則
ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 小學校及小學教場ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基
キ府知事縣令土地ノ情况ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ
管内ニ施行スヘシ

中學校其他ノ學校ノ教則ハ文部卿其綱領ヲ頒布スルコトアルヘシ
第二十條 公立學校教場ノ費用府縣會ノ議定ニ係ルモノハ地方稅ヨ
リ支辨シ町村ノ協議ニ係ルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十一條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校教場ニ於テ補助ヲ地方

月十七日

○文部省ヨリ師範
熊本縣公費給與ノ
學儀ニ付同校ノ
立師範學校モ授
業料ヲ取ル事トナ
レリ付テハ必シ
モ公費ヲ給スルニ
及ハスヤ
明治十八年九
月一日
指令(電報)

但已ムヲ得サル場合ニ於テハ修身讀書習字算術地理歴史ノ中地
理歴史ヲ減スルヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス

第八條 農學校ハ農耕ノ學業ヲ授クル所トス商業學校ハ商賣ノ學業
ヲ授クル所トス職工學校ハ百工ノ職業ヲ授クル所トス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルヲ得ヘ
シ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡
兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ
但シ本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可
ヲ經タルハ別ニ設置セサルモ妨ナシ(十四年七月第三十八號
布告參看本節末尾ニ在リ)

本月一日同公費
支給ノ件ハ師範
學校通則第九條
ノ通心得ヘシ
明治十八年九
月五日

○文部省ヨリ縣立
福嶋縣ノ業科ハ立
學校ノ授業料
給費貸費生徒ヨ
リ徴收セサル儀
ニ付同(電報)業料
立學校ハ貸費ノ
給費若クハ貸費
生徒ヨリ徴收セ
サル儀
直ニ御指揮ヲ乞フ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲メニ小學校ヲ設置スル獨
立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戶長ヲ以テ其員ニ加フヘシ
(明治十四年八月第二十五號布告ヲ以テ本條但書中給料ノ下ヘ旅
費以下ノ九字ヲ追加ス)

但人員ノ多寡給料旅費職務取扱諸費等ノ有無及其額ハ區町村會
之ヲ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府
知事縣令其中ニ就テ之ヲ撰任スヘシ

但シ薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草ノ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設
置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八ケ年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學校三ケ年ノ課程ヲ卒ラ
サル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少クトモ毎年十六週日

明治十八年八月廿九日
指(電報)令
本月廿九日發
本縣立學校授
報件ハ師範學
料ニ限リ之通
校月七日十八
月七十八年九

以上就學セシメサルヘカラス又小學科三ケ年ノ課程ヲ卒リタル後ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス但シ就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三ケ年以上八ケ年以下ナルヘク授業日數ハ毎年三十週日以上タルヘシ
但シ授業時間ヘ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ多カラサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ經ヘシ
但郡區長ハ兒童ノ卒業ヲ其町村ノ小學校ニ於テ試驗セシムヘシ

第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方稅若クハ町村ノ公費ヲ以テ

設置セルモノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置スルモノヲ私立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ヲ設置廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經可ク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十一條 幼稚園書籍館等ノ設置ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ開申スヘシ
但シ公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等設置廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ
但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ場合アリテ之ヲ斟酌

酌増減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスルキハ其意見ヲ付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レルモノハ地方稅ヨリ支辨シ町村人民ノ協議ニ係レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ補助チ地方稅ニ要スルキハ府縣會ノ議定ヲ經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第二十七條 凡ソ學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支辨スルコトヲ得ス

第二十八條 削除

第二十九條 削除

第三十條 削除

第三十一條 削除

第三十二條 削除

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養生センカ爲ニ師範學校ヲ設置

スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノト雖モ卒業證書ヲ請フ者アラハ其學業ヲ試験シ合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 削除

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齢十八年以上タルヘシ

但シ品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

但シ本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ケナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ム
ヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ
申報スヘシ

第四十二條 凡ソ學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルヲ得ス

但シ小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ
任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニアラサレハ入
學スルヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ノ體罰(毆打或ハ縛スル類)ヲ加フ
ヘカラス

第四十七條 生徒試験ノ時ハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スルヲ
得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令
之ヲ任免スヘシ

第四十九條 (明治十四年六月第二十五號布告ヲ以テ本條中俸額ノ下
旅費ノ二字ヲ追加ス)

町村立小學校教員ノ俸給旅費ハ府知事縣令之ヲ規定シテ文部卿ノ
認可ヲ經ヘシ

第五十條 各府縣ハ土地ノ實況ニ隨ヒ中學校ヲ設置シ又專門學校農
學校商業學校職工學校等ヲ設置スヘシ
參 看

○十四年七月第三十八號布告
教育令第九條小學校設置ノ區域町村ノ境界ニ仍リ難キ事情アルトキ
ハ別ニ區域ヲ畫スルヲ得ヘシ此旨布告候事

但文本ノ區域内ニ於テ會議ヲ要スルトキハ區町村會法第八條ニ準
據スヘシ

第二節 學事賞與例

○十五年十二月文部省第十五號達

第一條 地方ノ教育ヲ獎勵センカ爲メ左ノ各款ニ該當スル者ハ文部省之ニ賞與ス

一 教育ニ關スル一切ノ職員ニシテ特ニ勤勞アル者

二 公私立學校生徒ニシテ特ニ善良ナル者

第二條 第一條第一款ニ該當スル者ノ賞與ハ圖書器具等ヲ以テ之ニ充ツ其名稱及ヒ等差左ノ如シ

一 等賞與 二 等賞與 三 等賞與 四 等賞與 五 等賞與

第三條 第一條第二款ニ該當スル者ノ賞與ハ圖書器具等ヲ以テ之ニ充ツ其名稱及ヒ等差左ノ如シ

一 小學校生徒一 等賞與 小學校生徒二 等賞與 小學校生徒三 等賞與

二 諸學校生徒一 等賞與(小學校ノ外諸學校生徒ニ當ツヘキモノトス) 諸學校生徒二 等賞與 諸學校生徒三 等賞與

第四條 第一條ノ格ニ該當スル者ヲ査定センカ爲メ各府縣ヲシテ其

管下ノ教育ニ關スル職員及ヒ生徒等ヲ調査具申セシム

第五條 前條調査具申ノ方法期限等ハ文部省褒賞課ヲシテ之ヲ各府縣ニ通報セシム

第六條 賞與ハ各府縣ヲシテ之ヲ該職員、生徒等ニ傳達セシメ其請書ヲ徵ス

第七條 賞與シタル職員、生徒等ハ廣ク之ヲ報告スヘシ

第二節ノ二 學事獎勵品附與例

○同上

第一條 地方ノ教育ヲ獎勵センカ爲メ公私立學校、幼稚園、書籍館、教育博物館等ニシテ特ニ公益アル者ハ文部省之ニ獎勵品ヲ附與ス

第二條 獎勵品ニ圖書器具等ヲ以テ之ニ充ツ其名稱及ヒ等差左ノ如シ

一 小學校一 等獎勵品 小學校二 等獎勵品 小學校三 等獎勵品

二 中學校獎勵品

三 師範學校獎勵品

四醫學校獎勵品

五農學校獎勵品

六商業學校獎勵品

七職工學校獎勵品

八專門學校獎勵品(醫學校ヲ除クノ外專門學校ニ當ツヘキ者トス)

九諸學校獎勵品(前ニ學クル所ノ外諸學校ニ當ツヘキモノトス)

十幼稚園獎勵品

十一書籍館獎勵品

十二教育博物館獎勵品

第三條 第一條ノ格ニ該當スル者ヲ査定センカ爲メ各府縣ヲシテ其管下ノ學校、幼稚園、書籍館、教育博物館等ヲ調査具申セシム

第四條 前條調査具申ノ方法期限等ハ文部省發賞課ヲシテ之ヲ各府縣ニ通報セシム

第五條 獎勵品ハ各府縣ヲシテ之ヲ該學校、幼稚園、書籍館、教育博物館等ニ傳達セシメ其請書ヲ徴ス

第六條 獎勵品ヲ附與シタル學校、幼稚園、書籍館、教育博物館等ハ廣ク之ヲ報告スヘシ

第二節 華族女學校規則

○明治十八年九月宮内省達

華族女學校規則左ノ通相定候條此旨相達候事

華族女學校規則

第一章 通則

第一條 本校は 皇后宮の令旨に依りて建設し宮内省の所轄とす

第二條 本校に入學の生徒は華族の女子にして年齢滿六年以上滿十八年以下に在る體質健全の者たるへし

但本校の都合に依り士族平民の女子と雖も入校を許すことあるへし

第三條 本校の教旨は辨倫を本とし女子に適當したる學術技藝を教授するに在り

第二章 教科

學年	學科	學年		修身	和文學	漢文學	歐語學	算術
		第一級	第二級					
初等中學校	第一級	第一級	第二級	二	二	三	三	三
		第三級	全	二	二	三	三	三
高等中學校	第一級	第一級	第二級	三	四	四	四	四
		第三級	全	三	三	四	四	四
高等中學校	第二級	第一級	第二級	二	四	四	四	四
		第三級	全	二	二	四	四	四
高等中學校	第一級	第一級	第二級	二	四	四	四	四
		第三級	全	二	二	四	四	四
授業時間	各科	九	一六	九	二	二	二	九

每週授業時間表

圖畫	習字	禮式	裁縫	博物	物理	實物	本邦略史	地理	算術	讀書	修身
一	五	一	一			五			四	五	三
一	五	一	一			五			四	五	三
二	三	一	二	三				二	四	五	二
二	三	一	二				三	二	三	五	二
二	三	一	二				三		三	五	二
九	二四	六	九	五	三	一五	五	四	二一	三〇	一五

二十分間(土曜日は三十分間)とす

但臨時伸縮するふとあるべし

第四條 一學期中休業日左の如し

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

冬期休業 十二月廿五日ヨリ
翌年一月十日マテ

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

夏季休業 八月一日ヨリ
全卅一日マテ

日曜日

第四章 試業式

第一條 試業ハ中小學科に具する所の課業の熟否を檢査する者にシ

て小試業大試業の二種とす

第二條 小試業は授業凡三四十日毎に特に問題を設けて之を施し其得點の多寡及平常の功過勤惰を考へ生徒の席次を黜陟する者にシて一學年中五回之と施行す

第三條 大試業は中學科俱に學年の終り毎に特に問題を設けて之を施し本學年中平生の功過勤惰を考へ一級課程の進否を判するものとす

第四條 試業の成績は點數を以て評定し各試業の定點は一百を以て最上とし零と以て最下とす

第五條 小試業の一學科成績點を其試問に應答の評點を一半とし該小試業期內平生の功績點を一半とす其法并に最上點を百と定め其得點を相和して二除し而して得るものとす

第六條 大試業の一學科成績點は其試問に應答の評點を一半とし該學年内の本學科小試業成績點の總和を一半とす其法并に最上點を百と定め其得點を相和して二除し而して之を得る者とす

第七條 小學科上等第一級の卒業に因りて中學全科の卒業を認め中學科高等第一級の卒業に因りて中學全科の卒業を認むるものとす

第八條 大試業に合格の者には證書を授與し更に上層の級に進む之を及第とし不合格の者は元級に留む之を落第とす

第九條 大試業の成績優等にして平素の品行拔萃の者又は褒賞を興ふることをあるべし

第十條 大試業の成績點に因り受試生徒の及第落第を判定するの法左之如し

小學科

一課目以上全科平均	及第
五十點以上六十點以上	及第
五十點以下六十點以上	落第
四十點以上六十點以上	落第
五十點以上六十點以下	落第

一課目五十點以下なれ共其課目の大試業點或は平常點六十以上なれば及第

中學科

一課目以上全科平均	及第
五十點以上七十點以上	及第
五十點以下七十點以上	落第
四十點以上七十點以上	落第
五十點以上七十點以下	落第

一課目五十點以下なれ共其課目の大試業點或は平常點六十以上なれば及第

第十一條 前條落第の場合と雖も該學年中の小試業に相當の成績を得且酌量すべき事情ある者は教師の具狀に因り校長特別の處分を行ひ進級せしむることもあるべし尤此場合よ於ては證書を與へず其他總て及第者と異なることとし

第十二條 大試業の成績よ由て生徒學業の完了を認むるため與ふる所の證書は修業證書卒業證書の二種とす

第十三條 修業證書ハ小中學科俱よ毎級第の者に之を授與し卒業證書は小學は上等學科中學は高等學科各第一級の大試業よ及第の者よ之を授與す

第十四條 修業卒業二種の證書様式左の如し

修業證書式

第何號	證書
位爵氏名何女或ハ姉妹	
校印	何某
年	齡
中學何等科第何級修業	
候事	
年月日	校名

卒業證書式

第何號	證書
位爵氏名何女或ハ姉妹	
校印	何某
年	齡
中學全科卒業候事	
年月日	校名

第十五條 右二種の證書を與ふるは毎學年の終末に於て其儀式を設け各及第の生徒へ校長之を手授する者とす
但褒賞を與ふる者へ併せて褒狀を付與す

第五章

第一條 生徒の募集は毎學年の始に於てす尤缺員ある時は臨時入學を許すことあるべし

第二條 入學志願の者は左の式に準じて願書及學業履歷書を出すべし

願書及學業履歷書式

入學願用紙美濃紙

何縣華族

位爵氏名何女或ハ姉妹

何 誰

年 齡

宿所

右父兄或ハ後見人

右は今般御校へ入學志願に付御許容被下度依之學業履歷書相添
(履歷照なき者は以上七字を削つる)此段相願候也

年月日

華族女學校

御中

位爵

何

某印

學業履歷書

肩書同前

何

誰

生所

年月日

現住所

一年月日何地何小學校に就學何等科何級修業或ハ何等科卒業

一年月日何地何學校に入り或ハ何某に就き何年月間何學科修

業用書何々

一學業證書寫何々

右之通候也

第三條

入學願書は必ず正副二通を出し又學業履歷無き者は生年月

生所現住所を別記し之を願書に添へて差出すべし

第四條 入學の許可を得たる者は左の書式に依り保證書を出すべし

保證書 用紙美濃紙

何府華族

位爵氏名何女或ハ姉妹

何

誰

右の者今般御校へ入學御許可相成候上は御校則并御告諭等堅く
爲相守勤學可爲致候且本人在學中身上より起り候事柄は一切引
受可申候依て保證書如此候也

東京府華族

宿所

右保證人

年月日

位爵

何

某印

華族女學校

御中

第五條 保證人は必ず東京在籍の父兄若しくは宗親兩族の内を以て之に充つべし若東京在籍の父兄若しくは宗親兩族無き者は校長の許可を経て他の東京在籍の者を以て之に充つることを得

但保證人は必ず其印鑑を本校へ差出し置くものとす

第六條 保證人他府縣に移轉するか或は死亡するときは直ちに保證人を更定し本校に届出へし

第七條 本校の生徒は修學半途にして妄りに退學するを許さず尤病氣或は不得止事故に依り退學せむと欲する時は其事由を具し校長の許可を得べし

但怠惰驕慢にして訓誡に従はず若くは三度以上大試業に落第の者は退校を命ずることあるべし

第六章 缺席

第一條 凡生徒の妄りに缺席するを許さず

第二條 病氣或は他の事故に依り已を得ず缺席する者は即日其保證人若くは後見人より届出へし

但病氣缺席一週間以上に亘る時は更に醫師の診断書を添へて届出へし

第三條 事故ありて三日以上引續き昇校期限に後る、時は保證人或は後見人より届出べし

第四條 放課期限に先ち退校せざるを得ざる事故ある時は其都度保證人或は後見人より届出べし

第七章 生徒心得

第一條 本校の生徒たる者は常々 皇后宮の盛旨を服膺し心を正しくし行を勵まし温良貞淑の女徳を養成せん事を勉むべし

第二條 本校に在學業を勤むる者は他日夫に配しては良妻たるべく子を得ては賢母たるべく父母舅姑に事へては孝順の子婦たるべく奴婢僕隸に臨みては温良慈惠の内君たるべく畢竟貴族女子の資質を完備せむか爲るれば虚文に馳せず空想に流れず専ら應用の道と索むべし

第三條 身體は才智を貯ふるの器にして徳行を載するの車ともいふ

へき者あれば常々飲食を節し肌膚を清潔にし運動を適度とする等
凡そ攝養の道を守りて氣力を壯健にせん事を勉むべし

第四條 毎日の課業を怠ることなく教場の出入は必ず其時を守り教
場よ在ては別して容儀を正ましくし舉動と整肅にすべし

第五條 長上師友に對しては殊に禮讓と厚くし信義を重し又堅く學
校の規則及教誡を守るべし

第八章 授業料

第一條 授業料は一ヶ月金一圓より三圓迄とす

第二條 授業料は六月十二月の二度に分ち之を納附すへし其新に入
學したる者も亦入學許可の日より月數を算して納附すべし

第三條 課業を欲さず又は退學する者あるも既納の授業料を返付せざ
るものとす

○第二章 宗教

○第一款 條規及身分

第一節 神佛宗派

○十七年八月第十九號布達

自今神佛教導職ヲ廢シ寺院ノ住職ヲ任免シ及教師ノ等級ヲ進退スル
コトハ總テ各管長ニ委任シ更ニ左ノ條件ヲ定ム

第一條 各宗派妄リニ分合ヲ唱へ或ハ宗派ノ間ニ爭論ヲ爲ス可ラス
第二條 管長ハ神道各派ニ一人佛道各宗ニ一人ヲ定ム可シ

但事宜ニ因リ神道ニ於テ數派聯合シテ管長一人ヲ定メ佛道ニ於
テ各派管長一人ヲ置クモ妨ケナシ

第三條 管長ヲ定ム可キ規則ハ神佛各其教規宗制ニ由テ之ヲ一定シ
内務卿ノ認可ヲ得可シ

第四條 管長ハ各其立教開宗ノ主義ニ由テ左項ノ條規ヲ定メ内務卿
ノ認可ヲ得可シ

一教規

一教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事

一教師ノ等級進退ノ事

以上神道管長ノ定ムヘキ者トス

一 宗制

一 寺法

一 僧侶並ニ教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事

一 寺院ノ住職任免及教師ノ等級進退ノ事

一 寺院ニ屬スル古文書寶物什器ノ類ヲ保存スル事

以上佛道管長ノ定ムヘキ者トス

第五條 佛道管長ハ各宗制ニ依テ古來宗派ニ長タル者ノ名稱ヲ取調ヘ内務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ稱スルコトヲ得

第二節 管長及前教導職ノ身分

○十七年八月第六十八號達

管長身分ノ儀ハ總テ勅任官取扱ノ例ニ依ル

○十七年八月第六十九號達

今般教導職廢セラレ候ニ付テハ從前教導職タリシ者ノ身分ハ總テ其在職ノ時ノ等級ニ準シ取扱フ者トス

○第二款 雜部

第一節 僧侶ノ托鉢

○十四年八月内務省甲第八號布達

明治五年(十一月)敎部省第二十五號達僧侶托鉢禁止ノ義相應シ候條此旨布達候事

但托鉢者ハ管長ノ免許證ヲ携帯スヘシ

第一節ノ二 同心得

○十四年八月内務省乙第三十八號達

今般戊第二號ヲ以テ佛道各管長ヘ別紙ノ通相達候條萬一不都合之所業有之節ハ直ニ托鉢差止頓末詳細取調當省ヘ可申出此旨相達候事
戊第二號達

托鉢免許方并托鉢者心得

一 托鉢ヲ免許セシキハ左ノ雛形ニ照シ免許證ヲ交付シ其都度願者所在ノ地方廳ヘ通知シ東京ハ警視廳ヘモ通知スヘシ

一 托鉢ヲ行フハ午前第七時ヨリ同第十一時迄ヲ限リトス
但遠路往返ノ爲メ時間ヲ遷延スルハ非此限

一 托鉢者ハ如法ノ行装ニテ免許證ヲ携帯シ行乞スルヲ常トス施者ノ請フアルニアラサレハ人家ニ接近シ濫リニ歩ヲ駐ムヘカラス且施物ハ施者ノ意ニ任セ敢テ餘物ヲ乞テ許サス

一 托鉢者ハ一列三人以上十人以下タルヘシ且公衆來往ノ便ヲ妨クヘカラス

一 免許證ハ何時タリトモ警察官等ノ檢閱ニ供スヘキモノトス

第二節 廻國修業

○明治四年十月十四日布告

平民廻國修業ノ名義ヲ以テ六十六部ト稱シ仲間ヲ立寄宿所ヲ設置シ米錢等ノ施物ヲ乞候儀自今一切禁止候事

但從前寄宿六部共之内脱籍之者ハ復籍規則ニ照準シ其本貫ヘ歸籍可爲致事

第二節ノ二 玉占口寄

○六年一月教部省第二號達

從來梓巫市子並憑祈禱狐下杯ト相唱玉占口寄等ノ所業ヲ以テ人民ヲ

眩惑セシメ候儀自今一切禁止候條於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事

第二節ノ三 禁厭祈禱

○七年六月教部省乙第三十三號達

禁厭祈禱等ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ應シ從來ノ傳法執行候ハ元ヨリ不苦筋ニ候所間ニハ之レカ爲メ醫療ヲ妨ケ湯藥ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候抑教導職タルモノ右等貴重ノ人命ニ關シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候様ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戾シ政治ノ障害ト相成甚以不都合ノ次第ニ候條向後心得違ノ者無之様屹度取締可致此旨相達候事

第五類 會議

○第一款 府縣

第一節 府縣會議規則

○十三年四月第十五號布告

第一章 總則

第一條 府縣會ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方
法ヲ議定ス

第二條 府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ別ツ其定期ニ於テ開ク
者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條 通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事縣令ヨリ之
ヲ發ス

第四條 臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限り其他ノ事件ヲ議ス
ルヲ得ス

第五條 府縣會ノ決議ハ府知事縣令認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス
若シ府知事縣令其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルルハ其事由ヲ
內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

(明治十四年二月十四日第四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス)
前項ノ場合ニ於テ府知事縣令ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得
再議ノ後猶其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルルハ內務卿ノ指揮
ヲ請フ前項ニ同シ

第六條 府縣會ハ每年通常會議ノ初メニ於テ地方税ニ係ル前年度ノ
出納決算ノ報告書ヲ受ケ府知事縣令ニ説明ヲ求ムルヲ得若シ異
見アルルハ議長ノ名ヲ以テ直チニ內務大藏兩卿ニ上申スルヲ得
(明治十五年十二月廿八日第六十八號布告ヲ以テ本條ニ左ノ項追加)
出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府知事縣令
若クハ其代理人之ヲ説明スヘシ

第七條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)
通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣内ノ利害ニ關ス
ル事件ニ付キ建議ヲ爲サントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ
之ヲ會議ニ付シ可決スルルハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チ
ニ內務卿ニ建議シ又ハ府知事縣令ニ建議スルヲ得
(十五年二月第十一號達參看此末尾ニ在リ)

但シ臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限り建議スルヲ得
第八條 府縣會ハ府知事縣令ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付キ
會議ノ意見ヲ問フアルルハ之ヲ議ス

第九條 府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事縣令ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

府縣會ハ議員ノ内招集ニ應セヌ又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審査シ其退職者タルヲ決スルヲ得

(明治十四年二月十四日第四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス)

府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フイアルハ双方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事縣令ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルヲ得

第二章 撰舉

第十條 府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ撰フ

(明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通り追加ス)

每郡區議員定數ノ外補缺員トシテ十名以下ヲ增撰スルヲ得

第十一條 議長副議長ハ議員中ヨリ公撰シ之ヲ府知事縣令ニ報告シ府知事縣令ハ之ヲ内務卿ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但シ會期中滯在日當及ヒ往復旅費

ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第十三條 府縣會ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上往居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但シ左ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルヲ得ス

第一款 風癩白痴ノ者

第二款 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通改正ス)

舊法ニ依リ一年以上懲役及ヒ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者

新法ニ依リ公權ヲ剝奪及ヒ停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通り改

正ス)

官吏教導職及ヒ陸海軍諸卒現役ノ者

第五款 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者
第十四條 議員ヲ撰舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ
其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ
限ルヘシ

但明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ但書左ノ通り改正ス
但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル、者及ヒ陸海軍々人
現役ノ者ハ撰舉人タルヲ得ス

第十五條 議員ヲ撰舉セントスルキハ府知事縣令ヨリ某月間ニ撰舉
會ヲ開クヘキ旨ヲ布令シ郡區長ハ豫メ撰舉ノ投票ヲ爲スヘキ日ヲ
定メ少クモ十五日前ニ之ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第十六條 撰舉ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之
ヲ調査シ撰舉會中ノ取締ヲ爲スヘシ但シ便宜ニ因リ郡區廳外ニ於
テ撰舉會ヲ開クヲ得

第十七條 撰舉人ハ豫メ郡區長ヨリ付與シタル投票用紙ニ自己及ヒ
被撰舉人ノ住所姓名ヲ記シ豫定ノ日之ヲ郡區長ニ出スヘシ其投票
多數ヲ得タル者ヲ以テ當撰人トシ同數ナラハ年長ヲ取り同年ナラ
ハ隨テ以テ之ヲ定ム

但シ投票ハ代人ニ托シ差出スモ妨ケナシ

第十八條 投票スルノ後郡區長ハ撰舉人名簿ニ就テ投票ノ當否ヲ查
シ又被撰舉人名簿ニ就テ當撰人ノ當否ヲ查ス若シ法ニ於テ不適當
ナル者アルカ或ハ當撰人自ラ其選ヲ辭スルキハ順次投票ノ多數ヲ
得タル者ヲ取ル

第十九條 當撰人ノ當否ヲ查定スルノ后郡區長ハ其當撰人ヲ郡區廳
ニ呼出シ當撰狀ヲ渡シ當撰人ハ請書ヲ出スヘシ

但シ當撰人各請書ヲ出シタル后區郡長ハ其姓名等ヲ郡區内ニ公
告スヘシ

第二十條 一人ニシテ數郡區ノ選ニ當ルキハ其何レノ郡區ニ屬スヘ
キハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條 議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス第一

回二年期ノ改選ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條 議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ公選

スヘシ

第二十三條 前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得

第二十四條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ本條中轉任ノ

字ヲ轉籍ノ字ニ改メ而シテ但書ヲ追加ス乃チ左ノ如シ)

議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍

スルカ其他總テ缺員アルルハ更ニ之ニ代ル者ヲ選舉ス

但シ補缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取り尙缺員ア

ルキハ本條末文ノ手續ニ據ル

第三章 議則

第二十五條 議員半數以上出席セサレハ當日ハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十六條 會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルルキハ議長ノ可否

スル所ニ依ル

第二十七條 府知事縣令若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ
辨明スルヲ得

但決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二十八條 會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事縣令ノ要メニ依リ又ハ議長

ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條 議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レモ人身上ニ

付テ褒貶毀譽ニ涉ルコトヲ得ス

第三十條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之

ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セ

シムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章 開閉

(明治十五年十二月二十八日第六十八號布告ヲ以テ第三十一條第三

十二條左ノ如ク改正ス)

第三十一條 府縣會ハ毎年一度三月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府知事

縣令ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以内トス但區部郡部會ヲ開ク地方

ニ於テハ七日以内延期スルヲ得 (十七年十二月第二十八號布告參看此末尾ニ在リ)

第三十二條 通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルハ府知事縣令ハ臨時會ヲ開クヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ内務卿ニ報告スヘシ

第三十三條 會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スヲアリト認ムルキハ府知事縣令ハ會議ヲ中止セシメ内務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

(明治十五年十二月廿八日第六十八號布告ヲ以テ本條ヘ左ノ二項ヲ追加ス)

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會議内ニ於テ議案ヲ議決シ終ラサルトキハ府知事縣令ハ更ニ其議定ヲ要ス内務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

第一項ノ場合ニ於テ内務卿ハ府縣會ヲ停止スルヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ府知事縣令ニ於テ地方税ノ經費豫算及徴収

方法ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルヲアルキハ府知事縣令ハ其事由ヲ内務卿ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ

第三十四條 (明治十四年二月十四日第四號布告ヲ以テ本條中「閉會ヲ命シ又ハ」ノ七字ヲ削除シ而シテ第二項ヲ追加ス乃チ左ノ如シ) 會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スヲアリト認ムルキハ内務卿ハ何レノキヲ問ハス議員ノ解散ヲ命スルヲ得

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未ダ議定セサル議案アルキハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ

第三十五條 内務卿ヨリ解散ヲ命シタルキハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改撰スヘシ

○明治十三年十一月五日第四十九號布告

本年(本月)第四十八號ノ布告アルニ依リ本年(四月)第十五號布告府縣會規則ヘ左ノ通追加ス此旨布告候事

第五章 常置委員

第三十六條 府議會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ撰任スヘシ

(明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ本條ヘ左ノ通り追加ス)
常置委員定數ノ外數名ヲ增撰シ缺員アルキハ順次投票ノ外數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得

區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ選任スヘシ

(明治十五年十二月廿八日第六十八號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

第三十七條 常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及豫備ノ支出ニ付府知事縣令ヨリ諮問アルキハ其意見ヲ述フ常置委員ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徵收方法ヲ議決シ追テ府縣會ニ報告スルヲ得

第三十八條 常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且ツ通常會ト臨時會トヲ論セス府知事縣

令ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取り會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第三十九條 常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ

第四十條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ本條中常置委員ノ下「諮問」ノ二字ヲ增加ス)

常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス

第四十一條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス) 諮問會ハ府知事縣令ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ撰舉スヘシ

第四十二條 常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四十四條 府知事縣令ハ主務ノ僚屬ヲ委員會議ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辨明ヲ爲サシムルヲ得

第四十五條 常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ本條中ニケ年

トシノ下「議員ノ改選毎ニ之ヲ改選ス但」ノ十三字ヲ增加ス)

常置委員ノ任期ハ二ケ年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ改選ス但期限ニ

至リ再選スルヲ得

第四十七條 (明治十五年二月十四日第十號布告ヲ以テ議長ヲ府知事

縣令ノ五字ニ改ム)

常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ヲ選任ス

第四十八條 常置委員ハ三十圓以上八十圓以下ノ月手當及ヒ往復旅

費ヲ給ス其額ハ府會ノ議決ヲ以テ定ム

第四十九條 常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方稅

ヨリ支給ス

參看

○十五年二月第十一號達

府縣會規則第七條ニ依リ内務卿へ建議スルノ場合ニ於テ開會中議員

自カラ其建議書ヲ攜帶上京等ノ義ハ不相成候條此旨相違候事

但其旨府縣會へ達シ置クヘシ

參看

○十七年十二月第二十八號布告

明治十三年^四第十五號布告府縣會規則第三十一條中三月ヲ十一月ト

改正シ明治十八年十一月ヨリ施行ス

第一節ノ二 同心得

○十三年九月廿八日無號達

府縣會規則ノ儀ニ付左ノ二件爲心得相違候事

一 (本項ハ府縣會規則第十條へ追加相成候ニ付自然消滅シタル旨十

五年三月廿九日内務省ノ伺定アルヲ以テ略ス)

一 議長副議長共欠席スルキハ議員中ニ於テ臨時假議長ヲ公選シ其

日ノ會議ヲ開クモ妨ケナシ

○十三年十二月内務省乙第四十八號達

本年第四十九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心

得相達候事

- 一(此一項ハ同年乙第五十三號達ヲ以テ取消シ更ニ左ノ通り改正ス)
- 一常置委員ハ來十四年通常會開會前ニ於テ撰任スヘシ
- 一十三年度中常置委員ノ月手當又往復旅費ハ委員ヲ撰舉セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ
- 一郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員内ニ於テ其郡區撰出ノ人員ヲ定ムルヲ得
- 一常置委員補欠ノ爲メ相當ノ豫備員ヲ撰ヒ置クモ妨ケナシ
- 一第四十一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ務ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得
- 一第四十六條ノ通委員ノ任期ハ二ケ年タルヘシト雖モ若シ議員本分ノ任期ヲ終リタルモノハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス
- 一常置委員會議ノ細則ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

第一節ノ三 府縣會議定事件中ノ細目

○十四年二月第六號布告

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

第二節 區郡部會規則

○十四年二月第八號布告

東京府京都府大坂府神奈川縣區郡部會規則左ノ通相定メ明治十三年(五月)第二十六號及ヒ第二十七號布告廢止候條此旨布告候事

- 第一條 三府及ヒ神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分テ區部會郡部會トナシ區部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム
- 第二條 區部會郡部會ニ於テ議定スヘキ事件ト府縣會ニ於テ議定スヘキ事件トハ府縣會ニ於テ之ヲ議定ス
- 第三條 府縣會規則第十條ノ定限外ニ於テ區部議員ノ増加ヲ要スルハ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ其定限ヲ殊ニスルヲ得

第四條 府縣會ハ區部郡部議員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第五條 府縣會ノ議定ニ屬スル事件ニ付テハ區部郡部常置委員會同シテ諮問ヲ受ケ又ハ議決スヘシ

但區部郡部常置委員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第六條 (明治十五年二月十四日第十二號布告ヲ以テ削除ス故ニ略ス) 第七條 (同上故ニ略ス)

第八條 明治十三年度以前ニ係ル地方税ノ中區郡連帶支辨セルモノハ其決算ヲ府縣會ニ報告シ區郡ニ分別セルモノハ其決算ヲ各別ニ區部會郡部會ニ報告スヘシ

(明治十五年二月十四日第十二號布告ヲ以テ左ノ通り第九條ヲ追加ス)

第九條 區部ニ係ル戸數割ハ區部會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ内務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ家屋税ト爲スヲ得

第三節 府縣會議員ノ集會通信

○十五年十二月第七十號布告

府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルコトヲ許サス

其集會スルモノ何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルトキハ直ニ解散ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第十三條ニ依テ處分ス

○第二款 區町村

第一節 區町村會法

○十七年五月第十四號布告

第一條 區町村會ハ區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事件及其經費ノ支出徵收方法ヲ議定ス

第二條 區町村會ノ會期議員ノ員數任期改選及其他ノ規則ハ府知事縣令之ヲ定ム

第三條 區會ハ區長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス町村會ハ戶長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス

第四條 區會ノ評決ハ區長之ヲ施行シ町村會ノ評決ハ戶長之ヲ施行ス若其評決ヲ不適當ナリトスルモ其施行ヲ止メ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第五條 區長ニ於テ區會郡區長戶長ニ於テ町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルモ其會議ヲ中止シ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第六條 府知事縣令ニ於テ區町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルモ何時タリトモ區町村會ヲ停止シ又ハ之ヲ解散シテ改選セシムルコトヲ得

第七條 前條ノ場合ニ於テ停止又ハ解散ヲ命シタルモ更ニ開會ヲ命シ又ハ改選スル迄ノ間區長戶長ハ經費ノ支出徵收方法ヲ定メ府知事縣令ノ認可ヲ得テ施行スルコトヲ得

第八條 區町村ニ於テ議員ヲ選舉セス又ハ議員招集ニ應セスシテ會

議ヲ開クヲ得ス及議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ評決シ終ラサルモ前條ノ例ニ依ル

第九條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款ニ觸ル、者及陸海軍々人現役ノ者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十條 議員タルコトヲ得ヘキ者滿廿五歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款第四款ニ觸ル、者ハ議員タルコトヲ得ス

第十一條 區會ノ議長ハ區長町村會ノ議長ハ戶長ヲ以テ之ニ充ツ區長戶長若シ事故アルモハ區長戶長ニ於テ議員中ヨリ議長ヲ指定スルコトヲ得

第十二條 府知事縣令其管轄內ニ於テ町村會ヲ開設シ得ヘカサル狀況アルヲ認ムルモハ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十三條 府知事縣令ハ數區町村ニ關涉スル事件アルハ其區域ヲ定メテ聯合區町村會ヲ開設スルコトヲ得

第十四條 府知事縣令ハ水利土功ニ關スル事項ニシテ區町村會若クハ聯合區町村會ニ於テ評決スルヲ得サルモノアルハ特ニ其區域ヲ定メテ水利土功會ヲ開設スルコトヲ得

第十五條 聯合區町村會及水利土功會ハ總テ本法ニ準據ス其區域區長戶長數人ノ所轄ニ涉ルモノハ府知事縣令便宜郡區長ヲシテ之ヲ管理セシム但戶長ヲシテ其評決ヲ施行セシムルコトアルヘシ

○第三款 衛生

第一節 中央衛生會職制及事務章程

○十二年十二月第五十四號達

中央衛生會職制

(明治十七年九月第七十五號達ヲ以テ第一項左ノ如ク改正ス)

一本會ハ左ノ人員ヲ以テ之ヲ編成ス

會長

壹人

副會長

壹人

委員

醫員

拾人

化學家

三人

工學家

三人

衛生局長

警保局長

土木局長

參事院議官若クハ議官補 二人

警視總監

東京府知事

內務書記官

三人

臨時委員

無定員

一會長及委員ハ特選ニシテ副會長ハ委員中ヨリ投票ヲ以テ之ヲ撰定ス
一會長ハ本會議事ノ章程及ヒ附則ニ從ヒ議事ヲ整頓シ其議定セルモ

ノヲ内務卿ニ具申ス

一 副會長ハ會長缺席ノ時總テ其事務ヲ代理ス

一 委員ハ議事章程及ヒ附則ニ從ヒ諸議案ヲ議スルヲ掌ル

一 書記數員ヲ置キ議事ヲ筆記シ及ヒ文案計算翻譯等ノ事ヲ掌ラシム

中央衛生會事務章程

第一條 中央衛生會ハ内務卿之ヲ管理シ全國衛生事務ニ關スル諸件ヲ審議スル所トス

第二條 布告公達ノ衛生ニ關スルモノハ其發行前官府ノ諮詢ヲ受ケ之ヲ議スルヲ得ヘシ

第三條 本會ハ衛生各般ノ事項ヲ地方官ニ尋問シ或ハ臨時會員ヲ各地方ニ派遣シテ檢察セシムルヲ得

第四條 本會ニ於テ議定セル事件ハ之ヲ内務卿ニ開申ス

第五條 通常會ハ少クモ毎月一回之ヲ開クモノトス臨時會ハ内務卿或ハ會長ノ指圖ニ由テ之ヲ開キ又ハ委員三名以上ノ請求ニ依リ之ヲ開クヲ得

第六條 本會ハ委員半數以上出席スルニ非ラサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第七條 委員二名以上同意ノ所見アレハ之ヲ會議ニ付シ其可ト決スルモノハ本會ノ意見トシテ内務卿ニ建議スルヲ得

第八條 本會議決ノ事項中公告スヘキモノハ本會ノ名ヲ以テ之ヲ一般ニ公告ス

第九條 本會議事章程及附則ハ内務卿ノ認可ヲ得テ施行スヘシ

第二節 地方衛生會規則

○十二年十二月第五十五號達

第一條 本會ハ地方衛生ノ全体ヲ視察人民ノ健康ヲ保持増進スルノ

目的ニシテ府知事縣令ヲ輔翼スルカ爲メ設立スルモノトス

第二條 本會ハ左ノ人員ヲ以テ之ヲ編成ス

但地方ノ實況ニヨリ本條定限ノ外別ニ會員ヲ要スルモハ内務卿

ニ具狀シテ之ヲ増置スルヲ得(此但書ハ明治十三年二月十八

タル者ニ係ル)

醫師三名乃至五名

府縣會議員三名

公立病院長

公立病院藥局長

衛生課長

警察官一名

第三條 本會ハ府知事縣令ノ管理ニ屬シ其委員ハ知事縣令之ヲ命ス

但醫師ハ府縣會議員ヲシテ管内ノ開業醫師ヲ公撰セシメ府縣會

ヨリ出ス所ノ委員ハ其府縣會ニ於テ之ヲ公撰セシム

第四條 會長ハ府知事縣令之ニ任シ副會長ハ委員中ヨリ投票ヲ以テ之ヲ撰定ス

第五條 公撰員ノ在任ハ滿二ケ年トナシ滿期毎ニ之ヲ改撰ス

但前任ノ者ヲ再撰スルヲ得

第六條 委員ノ外書記一名若ハ二名ヲ命シ本會ノ雜務ヲ處辨セシム

第七條 委員ハ俸給ナシ但開會ノ地ヲ距ルニ里以外ニ住スルモノニ

ハ相當ノ旅費ヲ給シ又非職無給ノ者ニハ相當ノ手當ヲ給スルヲ得

第八條 本會ハ少ナクモ毎月一回之ヲ開クモノトス

但臨時又ハ至急ヲ要スル事件アル時ハ會長ノ招集ニ應シテ之ヲ

開キ又委員半數以上ノ請求ニ因テ之ヲ開クヲ得

第九條 本會ニ於テ議定スヘキ事件左ノ如シ

一 衛生上ニ關スル布告布達等ヲ該地方ニ實施スルノ方法

二 府縣ニ於テ發行スヘキ衛生上ニ關スル布達ノ草案

三 府知事縣令ヨリ發セル議案并ニ中央衛生會內務省衛生局及

ヒ郡區町村衛生掛ノ尋問ニ係ル事項

第十條 本會ハ各郡區役所ヨリ府縣廳へ上申セル衛生上ノ諸報告等

檢察スヘシ

第十一條 本會ハ地方ニ實施スヘキ衛生事項ニ就キ其考案ヲ府知事

縣令ニ建議スルヲ得

第十二條 本會ハ該地方ノ衛生上ニ關スル實況ヲ檢察スルカ爲メ擔

當吏員ノ派出ヲ府知事縣令ニ建議スルヲ得

第十三條 本會ノ議事筆記ハ時々之ヲ内務省ニ報告スヘシ

○第四款 勸業

第一節 勸業諮問會

○十六年五月第十三號達

各地方ノ便宜ニ從ヒ左ノ條項ニ照準シテ勸業諮問會并勸業委員ヲ設置スルコトヲ得

第一條 諮問會ハ各府縣勸業事務ニ付府知事縣令ノ諮問ニ備ル者トス

第二條 諮問會員ハ府知事縣令ニ於テ管内農商工事ニ名望アル者ヲ選ンテ之ニ充ツ其人員并處務ノ順序等總テ府知事縣令適宜ニ之ヲ定ムヘシ

第三條 諮問會員ノ旅費日當ハ地方稅中勸業費ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 勸業委員ハ區町村若クハ聯合區町村ニ於テ勸業ノ事ヲ擔任シ又ハ(區郡)長戸長ノ諮問ニ備フルモノトス

第五條 勸業委員ノ人員撰舉方法及ヒ處務ノ順序等ハ區町村會又

ハ聯合區町村會ニ於ヒテ之レヲ評定シ府知事縣令ノ裁可ヲ受クヘシ

第六條 區町村若クハ聯合區町村ニ於テ農業會商業會工業會又ハ農商工ヲ併セタル勸業會其他同業會ヲ設置スルキハ勸業委員ヲシテ會員ヲラシムルコトヲ得

第七條 府知事縣令ニ於テ勸業委員ノ設置及ヒ第六條ノ各會設立ヲ要用ト認ムルキハ誘導シテ之ヲ設置セシムルコトヲ得此場合ニハ農商務卿ニ稟議シテ認可ヲ請クヘシ

第八條 勸業委員ノ旅費日當及ヒ第六條ノ各會諸費ハ區町村及ヒ聯合區町村ノ協議費ヲ以テ支辨シ又ハ關係各業者ニ於テ協議支辨スルコトヲ得但有志者ヲ以テ組織スル者ハ此例ニアラス

第九條 農商務卿及ヒ主務ノ官署ハ各地方勸業上ノ件ニ付諮問會又ハ第六條各會ノ意見ヲ問フコトアルヘシ
諮問會又ハ第六條ノ各會ハ勸業上ノ公益ノ件ニ付農商務卿及ヒ主務ノ官署ニ意見書又ハ報告書ヲ呈スルコトヲ得

第六類 土地

○第一章

○第一款

第一節 地所名稱區別

○七年十一月第二十號布告

明治六年^{三月}第三百十四號布告地所名稱區別左ノ通改定候條此旨布告候事

官有地

第一種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方稅ヲ賦課セサルヲ法トス

一 皇宮地 皇居離宮等ヲ云フ

一 神地 伊勢神宮山陵官國幣社府縣社及ヒ民有ニアラサル地ヲ云

第二種 地券ヲ發シ地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス尤府縣所用ノ地ハ地券ヲ發セス唯帳簿ニ記ス

但此地ニ在ル官舎ヲ貸渡ス時ハ借地料ヲ賦スヘシ

一 皇族賜邸

一 官用地官院省使寮司府藩縣(本文)廳裁判所警視廳陸海軍(本分)管其他政府ノ許可ヲ得タル所用ノ地ヲ云フ

第三種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス

但人民ノ願ニヨリ右地所ヲ貸渡ス時ハ其間借地料ヲ納メシム

一 山岳丘陵林藪原野河海湖沼池澤溝渠堤塘道路田畑屋敷等其他民有ニアラサルモノ

一 鐵道線路敷地

一 電信架線柱敷地

一 燈明臺敷地

一 各處ノ舊跡名區及ヒ公園等民有ニアラサルモノ

一 人民所有ノ權利ヲ失ヒシ土地

一 民有ニアラサル堂宇敷地及ヒ墳墓地

一 行刑場

第四種 地券ヲ發セス地租ヲ課セス地方稅ヲ賦セサルヲ法トス

一 寺院大中小學校說教場病院貧院民有ニアラサルモノ

民有地

第一種 地券ヲ發シ地租ヲ課シ地方稅ヲ賦スルヲ法トス

一 人民各自所有ノ確證アル耕地宅地山林等ヲ云フ

但此地賣買ハ人民各自ノ自由ニ任スト雖モ潰レ地開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フ法トス

一 人民數人或ハ一村或ハ數村所有ノ確證アル學校病院鄉倉牧場秣場社寺等官有ニアラサル土地ヲ云フ

但此地賣買ハ其所有者一般ノ自由ニ任スト雖モ潰地或ハ開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス

第二種 地券ヲ發シテ地租地方稅ヲ賦セサルヲ法トス

一 官有ニアラサル鄉村社地及ヒ墳墓地等ヲ云フ

一 民有ノ用惡水路溜池敷及堤敷及井溝敷地

一 公家ノ用ニ供スル道路

但其地形ヲ變換スルキハ管轄廳ノ許可ヲ請フベシ

明治十八年六月內務省第貳拾壹號達

官有地拂下並ニ貸下之儀左之通相定メ明治九年^三內務省乙第三十四號達ハ廢止ス此旨相達候事

一 凡ソ官有地ヲ年賦又ハ延納ニテ拂下タルモノ其代金未完納中ハ抵當トシテ其地券ヲ官廳ヘ差出サシムヘシ若シ之ヲ差出サハルモノハ地所拂下ノ効ヲ失フモノトス

一 凡ソ官有地ノ拂下代金ヲ期限ノ通上納セサルモノハ其拂下ヲ取消スヘシ此場合ニ於テ既納ノ代金アルモノハ之ヲ下戻シ地所ハ現形ノ儘返上セシメ之カ爲メ金利倍償等ヲ下付スルコトナカルヘシ

一 凡ソ官有地ノ借地料ヲ期限ノ通上納セサルモノハ其貸下ヲ取消スヘシ此場合ニ於テハ假令何如ナル勞費アルモ其償ヲ下付スルコトナカルヘシ

一 凡ソ官有地借用ノ許可ヲ得タル者ハ其當初出願ノ目的ニ隨テ之ヲ使用スルコトヲ得ルト雖モ他人ヘ書入又ハ質入ヲ爲スコトヲ得サル者トス但轉貸ハ官ノ許可ヲ得ルニ於テハ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ

第二節 隱田切開切添地

○九年五月第六十七號布告

第一條 隱田切開切添地ノ此布告以前ニ係ルモノ該府縣地租改正濟マテニ申出ルルハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノ律ニ照シ處分スヘシ

但シ此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論渾テ律ニ照シ處分スヘシ

第二條 廉落殘歩ハ此布告ノ前後ヲ論セヌ該府縣地租改正濟マテニ申出ルルハ其罪ヲ問ハス其者所有ニ可相定若シ之ヲ申出スシテ改正濟後ニ至リ發覺スルモノハ律ニ照ラシ處分スヘシ

第三條 官簿ニ記載アル地並ニ記載ナシト雖モ從來官山官林用地附屬地等ノ證アル地ヲ私ニ田畑宅地等ニ侵墾セシモノハ此布告以前ニ係ルモノハ該府縣地租改正濟マテニ申出ルルハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ其者へ素地相當代價ヲ以テ可拂下其民有トナシ難キモノハ直チニ返地セシメ事情ニヨリテハ更ニ借地

差許ス儀モ之アルヘシ

第四條 前條侵墾地々租改正濟後ニ至リ發覺スルモノ及ヒ此布告以後ニ係ル侵墾地ハ渾テ律ニ照ラシ處分スヘシ

第五條 前條ノ地ハ舊藩縣ヨリ開墾願濟ノ分タリヒ未タ地代金ヲモ納メスシテ未着手ノモノハ直チニ返地セシメ其民有地トシテ差支ナキモノハ更ニ相當代價ヲ以テ其者へ可拂下其地代金ヲ納メスヒ已ニ着手スルモノハ直ニ其者ノ所有ト定ムヘシ

第六條 凡ソ民有ニアラサル地ヲ私ニ賣買或ハ質入ト爲ス者此布告以前ニ係ル分地租改正濟マテニ申出ルモノハ其罪ヲ問ハス其民有地トナシ差支ナキモノハ賣買並ニ流質地共買得者及ヒ質取主へ其儘無代價ニテ下渡其民有地トナシテ差支アルモノ並ニ質地年限中ノモノハ官有地ニ編入スヘシ此布告以後ニ係ルモノハ地租改正濟ノ前後ヲ不論律ニ照シ處分スヘシ

第二節ノ二 民有開墾地調査順序

○十五年一月大藏省第一號達

第一款 鐵下年期

第一條 凡ソ民有ノ土地ヲ開墾スルニ際シ鐵下年期ヲ願出ル時ハ實際要スル費用ト成功ノ後該地ヨリ得ヘキ收利トヲ豫算シ其費用ヲ償却シ得ヘキ方法ニ至ル迄詳細ニ取調願書ニ副ヘ差出サシムヘシ
第二條 前條ノ願書ヲ差出シタルルハ實地ニ就キ反別ノ廣狹ヲ概量シ其調書ノ當否ヲ審査スヘシ

第三條 調書ハ左ノ數項ニ據リ審査スヘシ

第一項 人夫ハ事業ノ難易ニ據リ其多寡如何

第二項 雇錢ハ近傍普通ノ賃金ニ較ヘ其高低如何

第三項 收利ハ近傍ノ熟地ニ比シ其多寡如何

第四項 收量ニ換ヘタル金額ハ近傍市場ノ平均(既往三ケ年或ハ五ケ年間)相場ニ據リ其當否如何

第四條 前條ノ審査ニ於テ其調書適當ナリト視認ルルハ該費用ヲ償却シ得ルノ年數ヲ目的トシ鐵下年期ヲ附與スルモノトス

第二款 年季明

第五條 鐵下年期明ニ至ラハ反別ヲ丈量シ相當ノ收穫地價トモ取調差出サシムヘシ

第六條 前條ノ調書ヲ差出シタルルハ實地ニ就キ反別ヲ査定シ收穫地價ハ近傍類地ニ比準シ適當ニ調査スヘシ

第七條 期明ニ至リ該地ノ幾部分ヲ竣功セシキハ其部分ノミ第五六條ノ例ニヨツテ調査スヘシ其殘地又ハ全部未着手ト雖モ引續キ繼年期ヲ請求スルルハ第一款第一條ニ據リ更ニ詳細ノ調書ヲ添ヘ出願セシムヘシ

第八條 第七條ノ繼年期ヲ請求スルルハ第一款第二三條ニ據テ審査スヘシ

第二節ノ三 宅地成

○十年五月大藏省乙第六號達

明治九年一月乙第三號ヲ以テ非常ノ勞費ヲ掛ケ開墾セシ宅地成分ノ儀相達置候所左ノ通更正増加候條此旨相達候事

第一條 地租改正後民有山野ノ嶮阻等ヲ墾平シ或ハ池沼ノ類ヲ埋堀

シ其素地ノ全體ヲ變換シ宅地トナシ非常ノ勞費アルモノハ費力ノ
淺深ヲ審査シ相當年季ヲ定メ年季中素地ヲ地價ニ據リ收税シ其他
河海湖水等ヲ無代下與シ之レヲ埋堆シテ宅地トナスモノハ相當免
稅年季ヲ附與スヘキモノトス

但年季ハ伺ヲ經テ定ムヘシ

第二條 地租改正後民有ノ田畑及ヒ山野ヲ宅地トナスモノハ改正地
價據置期限年度中ハ素地ノ稱ニ據置ヘシ

第三條 民有ノ山野池沼等耕地ニ開墾ノ許可ヲ得テ鋤下年季中其持
主ノ便宜ニヨリ宅地トナスモノモ年季中ハ耕地ト一般鋤下地ニ据
置ヘシ

第四條 荒地免稅年季中宅地トナスモノハ宅地トナリタル翌年ヨリ
該宅地相當ノ地價ヲ定メ課税スヘシ

但池成沼成等ノ荒地ヲ埋堆宅地トナスカ如キ非常ノ勞費アルモ
ノハ伺ヲ經テ其年季中ニ据置ヘキモノトス

第三節 民有荒地處分規則

○十年一月第八號布告

第一條 荒地トハ山崩川欠押堀石砂入河原成池成川成海成湖水成等
ノ天災ニ罹リタル土地ヲ云フ

第二條 民有地荒地トナリタル時ハ荒地一筆限帳(字番號一筆限步
數持主姓名及ヒ荒地ノ名稱ヲ詳記セシムヘシ)並ニ荒地繪圖(荒地
ニ係ルモノ及ヒ接續ノ地形迄ヲ詳細ニ畫キ荒地ト生地ト色分ケヲ
ナサシムヘシ)ヲ出サシメ畝杭ヲ建サセ境界ヲ明瞭ニシ其廣狹ヲ
丈量シ反別ヲ限リ損害ノ輕重ヲ區別シ該地接續ノ生地圖面ヲモ照
合シ免稅ノ年季ヲ定ムヘキモノトス

第三條 荒地免稅ノ年季ハ其損害ノ輕重ト起返シノ難易ニ據リ實地
ニ應シ損害ノ年ヨリ十年以內ヲ以テ相當ノ年季ヲ定ムヘシ滿期ニ
至リ檢査ヲ經テ猶起返シ能ハサルモノハ年季ヲ繼クヘキモノトス
第四條 川成海成湖水成等ノ荒地ニシテ地主持續クヘキ望アルモノ
ハ十年迄ノ年季ヲ定メ無代價ノ券狀ヲ付與スヘシ但右ノ場合ニ於
テ所有主其土地起返シノタメ杭代打連子若シクハ箒柵取設ケサル

モノハ他人ノ漁魚採藻等ヲ拒ムノ權ナキモノトス

第五條 右年期明ニ至リ原形ニ復セサルモノハ又十年以内ノ年期ヲ繼キ猶依然タルモノハ付與スル處ノ券狀ヲ還納セシメ荒地ノ名稱ヲ除去シ全ク川海湖地(即チ官有)ニ歸スルモノトス且此布告以前ニ係ル川海湖水成等ノ荒地ハ本年ヨリ(地租改正既濟ノ府縣ニテ荒地年期ヲ定メアルモノハ其時ヨリ)起算シ本條ニ據リ處分スヘキモノトス

第六條 池成ノ荒地年期明ケニ至リ假令原形ニ復セサルモ水草魚鳥等ノ收利アルモノハ其利益ニ應シ地價ヲ定メ生地ニ組換ヘ池ト稱スヘシ

第七條 荒地年期中竹木萱葭ノ類自然ニ生立多少利益アル者ハ年期明ノ際ヨリ蔽林萱生地等ノ部分ニ組換フヘキモノトス

第八條 荒地年期明ニ至リ起返ルモノハ荒地起返一筆限帳(荒地一筆限帳ノ體裁ニ準ス)並ニ荒地起返繪圖(荒地繪圖ニヨリ之ヲ製シ該地ニ接續スル從來ノ生地ト起返地及ヒ猶荒地ニテ殘ルモノアレ

ハ一々明瞭ニ色分チナサシムヘシ)ヲ出サシメ畝ヲ建サセ一筆限リ耕地ノ分ハ畦畔ヲ除キ更ニ實地ヲ丈量シ該地ニ接續スル從來ノ生地及ヒ猶荒地ニテ殘ルモノアレハ之ヲ地券臺帳荒地帳面等ニ照シ綿密檢査ヲ經起返反別ヲ定メ而シテ地價ヲ調査スヘキモノトス
第九條 免稅年期明ニ至リ其實況直ニ原地價ニ復シ難キモノハ五割以内ノ減額ヲ以テ更ニ五ヶ年以下低稅年期ヲ付シ其期明ニ至リ原地價ニ復スヘキモノトス(本條以下三條十五年第六號布告追加)
第十條 低稅年期明ニ至リ尙原地價ニ復シ難キモノハ近傍ノ地ニ比準シ更ニ相當ノ地價ヲ付スヘキモノトス
第十一條 免稅年期明ニ至リ地目變換セルモノハ現地目ニ組替ヘ近傍ノ地ニ比準シ相當ノ地價ヲ付スヘキモノトス
○明治十八年八月大藏省第四拾九號達
民有地々價租額ニ關スル處分左ニ掲グルモノハ今後委任候條例規ニ準據シ處分濟ノ後左ノ離形ニ倣ヒ取調届出ヘシ
開墾地銀下年期明及年期ヲ要セサルモノ

荒地免租年期明
 地目變換
 官有地拂下及無代下渡
 右四項ハ一回ノ調査一町村内其段別一類地壹町步未滿ニ類地五町步未滿ノ地價租額ヲ査定スルヲ
 免稅地稅換及畦畔廢除有租地成
 改租以前ノ開墾地畝下繼年期有租地成
 右二項ハ段別ノ多寡ニ係ハラズ地價租額ヲ査定スルヲ
 畦畔新設
 右ハ步數ノ多寡ニ係ハラズ其地價租額ヲ除却スルヲ
 地租増減ニ係ル伺届ハ左ノ期限表ニ據リ進達スヘシ
 但該期限ニ伺届ノ事項ナキハ其旨主稅局ヘ報道スヘシ
 右相達候事

開墾地荒地地目變換等ノ處分伺届ハ十七年四月五日
 當省達地租條例取扱心得書ノ雛形ニ準シ調製スヘシ

△印ハ朱

種目	拂下		下渡			合計
	田	田	山林	畑	郡村宅地	
地目段別地價地租	△是ハ何々(事故詳細記載)ノ事由ニ依リ拂下候分		△是ハ何々(事故詳細記載)ノ事由ニ依リ下渡候分			
同乘該地處分賦租ノ月割同乘算翌年ニ涉	何月何日	何月何日	何月何日	何々何月	何々何月	
過不足	同	同上	同上			
何國何郡(區)						
明治何年	至何月何日					
賦課届						

第一編行政 第六類土地 民有開墾地調査順序 三百四十五

一 地目中賦租起月ノ異ナルモノ毎ニ之ヲ列記スヘシ
 一 拂下其事故アルモノハ其旨腹書ニ詳記スヘシ
 一 委任制限段列以上ノ伺届書モ此式ニ倣ヒ調成スヘシ
 一 二郡區以上ハ一郡區ノ式ニ倣ヒ毎種目地目限リ(中)地目割分及腹書ヲ費セズ付スヘシ

地租ニ關スル屆書進達期限		種類	調査區分	申牒類府縣發遣期限
拂下地	有租地成賦租同	第一回自一月至三月	四月二十日限	
免租地組替及畦畔廢除		第二回自四月至六月	七月二十日限	
官有地		第三回自七月至九月	十月二十日限	
河川敷		第四回自十月至十二月	翌年一月二十日限	
公立學校敷地				
鄉村社地	免除租屆			
墳墓地				
用惡水路溜池堤塘井溝敷成				
公衆ノ用ニ供スル道路敷成				
畦畔新設				
開墾地	同屆			
荒地免租				
同再荒				

地目變換地價修正屆同	春期檢査濟	六月三十日限
秋期檢査濟	十二月二十日限	
開墾地	同屆	六月三十日限
同墾下年期明賦租		
同年期廢止		
同改租以前ノ開墾地		
同荒地免租	同屆	六月三十日限
同低價年期明賦租		
同免租年期明官有川海湖成		
分合筆地段別租額増減屆	一箇年分	翌年一月二十日限

一此表ニ列記セシ種類ノ外ハ其時々進達スヘシ
 但申牒書ハ賦除租屆ノ様式ニ準シ一紙ニ取東子調成スヘシ
 一經伺ノ上處分スヘキモノ、内拂下地及ヒ開墾地ノ類ニシテ都合ニ依リ至急ヲ要スル
 モノハ此期限ニ拘ハラヌ其時々廉限リ伺出ヘシ

○第二款 賣買讓渡

第一節 公用土地買上規則

○八年七月第三百三十二號達

第一則 公用土地買上トハ國郡村市ノ保護便益ニ供スル爲メ院省使
應府縣ニ於テ人民所有ノ土地ヲ買上ルヲ云フ

但國郡村市ノ保護便益ニ供スル爲メ人民ニテ鐵道電信線上水等
ノ大工ヲ起ス時ハ其事業ニヨリ特別官許ノ上此規則ニ準スルヲ
得ヘシ

第二則 公用土地買上ハ必ス其地ヲ要セサルヲ得サルニアラサレハ
之ヲ行ハサルモノトス故ニ人民之ヲ拒ムヲ得ス

但其地ニ屬シタル植物建造物等モ亦本文ニ同シ

第三則 院省使ニテ公用土地買上ヲ要スルハ左ノ事由ヲ內務省ニ
照會シ內務省ヨリ地方官ニ諮詢シテ差支ナキ旨ノ回答ヲ得タル上
該廳ヨリ太政官ニ上陳シ允裁ヲ得ルモノトス
廳府縣ニテ公用土地買上ヲ要スルハ左ノ事由ヲ具狀シテ內務省

ニ稟請シ內務省ヨリ太政官ニ上陳シ允裁ヲ得ルモノトス

內務省ニ照會又ハ稟請ス可キ事由左ノ如シ

一 土地ヲ買上ルノ事由

一 該地ヲ必需スルノ事由

某管轄國郡村市

一 該地ノ番號

一 該地ノ字

一 該地ノ地種

一 該地ノ地主

一 東西何程南北何程

一方積何程

但該地ノ實測圖ヲ添フル者トス實測圖ハ近傍ノ地形ヲ略記スヘ
シ

第四則 公用ノ爲メ買上ル地價ハ券面ニ記シタル代價タルヘシ然レ
モ地價相違ヲ生セシ時ハ所有者ト買上ヘキ該廳トノ商議ヲ以テ代